

第 5 章

ケニア的複数政党制

－ その軌跡と機能変化する法制度 －

津田みわ

第 1 節 はじめに

2002 年 12 月末にケニアで行われた独立後通算 9 回目の総選挙は、選挙による大統領の交代と、同じく選挙による政権党の交代という、「快挙」をもたらすものになった。1963 年の独立以来 40 年近くにわたって政権党の座を譲ることのなかったケニア・アフリカ人全国同盟 (Kenya African National Union: KANU) にかわって政権を獲得したのは、全国虹の連合 (National Rainbow Coalition: NARC) だった。1978 年の就任以来、約四半世紀もの間在職を続け、ついに引退した第 2 代大統領 D・モイ (Daniel arap Moi) にかわって第 3 代大統領に当選したのは、やはり NARC の大統領候補 M・キバキ (Mwai Kibaki) だった。

NARC は、それまで野党の主勢力だった民主党 (Democratic Party: DP。委員長はキバキ)、民主主義復興フォーラム - ケニア (Forum for Restoration of Democracy [FORD Kenya], 以下 FORD - ケニア)、社会民主党 (Social Democratic

Party: SDP) を離党した同党主流派(後述する)そしてKANU 離党者が結成した自由民主党(Liberal Democratic Party: LDP)が中心となって統一候補を擁立するために結成した政党であった(NARC については第2節で詳しく述べる)。KANU 政権の打倒という共通目標を柱に、大規模な雇用創出、医療費と教育費の負担軽減、汚職撲滅と高い経済成長の達成、新憲法制定による権力分散を選挙公約として打ち出したNARCは、傘下の各政党がこれまで全国で築いてきた支持基盤からの票を結集し、キバキの大統領当選をはじめ、国会での6割を超える議席の獲得に成功したのだった。

しかしいったん発足したキバキ政権下では、「DP政権」とのそしりを免れない運営が展開されることとなり、選挙民にとどまらずNARC内部からも激しい批判が起こりつつある。キバキは、モイと同じく私的な諮問団(「ファミリー」「キッチン・キャビネット」などと呼ばれる)を側近を集めて作り、閣議や党執行委員会といった公的な意思決定の仕組みを外れた予備協議を行っているが、その顔ぶれは全員が結成以来ともに活動を続けてきたDPメンバーである¹。また、貧困対策や汚職撲滅が進まないことにも、これまでナイロビとその隣接地域で富裕な農民やビジネスマン階層という既得権益層を支持基盤としてきたDPの体質が少なからず関わっていると考えられる。新憲法の制定に関しては、大統領権限の縮小のために設けられる予定だった首相ポストの是非をめぐってNARC内に極端な意見対立が生まれており、首相ポスト新設への反対派の中心には、キバキのキッチン・キャビネットの構成員のひとりC・ムルンガル(Chris Murungaru。大統領府治安担当国務大臣)らがいる。政権獲得後のNARC政権内部で起こってきた対立と混乱についてはここで詳述する余裕はない²が、キバキのキッチン・キャビネットを頂点とするDPと、対抗各勢力という形で、成立一年を見ないうちにNARC政権内の対立が深まっていったこと、そのすべてに対し選挙民は次回の総選挙までなすすべなく見守るしかないこと - これが「快挙」だったはずのNARC政権発足後に進んでいるケニア政治の実態である。

しかし、こうした事態の生じているケニアは、「民主化」の議論³に照らせ

ば、まごうかたなき優等生となる。ソ連邦の解体、欧米諸国や日本など援助供与国側によるコンディショナリティへの政治的要件追加などを契機にアフリカ諸国で次々と大規模な政治変動が起こったのは、1980年代末のことであった。そこで生起したのはまずもって民主主義を整備・回復しようとする「民主化」であり、多くの場合、一党制や軍政の解体とそれに伴う複数政党制選挙の実施が試みられた。「民主化」パッケージの主な柱が複数政党制選挙の実施だったことに呼応したこともあって、1990年代にはアフリカ諸国を対象に選挙の実施と結果受け入れ - 複数政党制採用後の「1回目選挙 (founding elections)」の成否、「2回目選挙 (second elections)」の成否 - に注目する民主主義への「移行・定着」研究があまた登場することになった⁴。ケニアは、この枠組みにおいては、「1回目選挙」「2回目選挙」とも曲がりなりにも実施、結果受け入れを果たした少数の「優等生」国家に名を連ねることになる (Barkan [1993]、Bratton [1998])。

ただし、1990年代のアフリカ諸国では、数回にわたって複数政党制選挙が実施されたその同じ国で、政権交代の可能性を事実上圧殺する歪みの多い政治体制が温存されているケースや、選挙運動の変種として武力紛争が故意に起こされるケース、内戦を含む深刻な対立が生じるケースが後を絶たなかった。選挙の実施に分析上の力点を置いた「民主化」論に限界があることが徐々に明らかになる中で、1990年代後半になると今度は様々な「留保付き民主主義論」が生み出されることになった。ヤングの「準民主主義国」(semidemocracies)の議論、オッタウェイらの「準権威主義体制」(semi-authoritarian regimes)の議論がその代表である (Young [1999: 34-35]、Ottaway [2003: 3])。それらによれば、「留保付き民主主義」体制には、ある程度の政治的自由化 - 報道の自由の存在、人権状況の改善、競争の導入 - がある一方で、政権交代の可能性を下げる法制度が意図的に導入されていること、が重要なポイントとしてある。

ではケニアはどうだろうか。これについてもケニアの場合、上で見たように、2002年の総選挙でKANUの政権があっさりと終結し、野党を中心に生

み出された NARC への政権交代が成立している。ケニアは、この既存の「留保付き民主主義」論が措定してきた体制の像からもずれ始めているといえよう。最初のハードルとされた「1 回目選挙」「2 回目選挙」をこなした上「3 回目選挙」さえ終え、さらに民主主義ぶりに「留保」をつけられるかどうかの分水嶺となってきた政権交代さえ「成し遂げて」しまったケニアの体制は、選挙の形態や頻度、参加政党の数、政権交代の有無などの指標から見れば、留保なしの、いわゆる欧米型民主主義と分類されうるような状態を手に入れつつあるのかもしれない。

しかし、冒頭で述べたように、ケニアで成立した NARC 政権の「DP 政権」化という問題は深刻であり、また権威主義体制の典型だったモイ政権や初代大統領 J・ケニヤッタ (Jomo Kenyatta) 政権下で横行した私的諮問団「キッチン・キャビネット」を用いた意思決定も、「民主化」の優等生ケニアで再び繰り返されようとしている。ケニアで成立しつつある体制を単なる民主主義ととらえることではこぼれ落ちるものにこそ、実はケニアの体制をとらえるカギがあるのではないだろうか。「民主化」後ケニアの政治体制は、民主主義との関連でとらえる仕方からいったん離れて検討されねばならないのではないか - それが本稿を貫く問題意識である。ただし NARC 政権は成立してまだ 1 年余りしか経ておらず、内部抗争の深刻化、新憲法制定の成否など、より包括的なケニアの体制を検討するには引き続き継続的な情報収集と分析が必要となる。そこで以下では、今後より詳細な検討を行っていくための準備作業として、「ケニア的複数政党制」とも呼ぶべきもののありようについて、まずその成立時 - ケニアの場合それは 1990 年代の「民主化」ではなく、1963 年の独立にさかのぼる - から現在に至る実態面の展開を跡づける。これは、「民主化」にかかわる政治変化を相対化するために不可欠であるだけでなく、モイ、キバキら 1960 年代から国政を舞台に活動を続け、1990 年代の「民主化」にまつわる制度改革の担い手となった政治エリートの経験を辿る上でも重要な作業である (第 2 節)。つぎに、NARC 政権の「DP 政権」化という現状に鑑み、ケニアの複数政党制における政党に着目してその特徴の抽

出を試みる(第3節の1)。続いてそうした特徴を生んだ法制度的な背景について、第2節で振り返った実態面の展開と対比させる意味で探してみたい(第3節の2)。なお、本章の末尾では1997年総選挙で成立した第8次国会の全国会議員と2002年総選挙で成立した第9次国会の全国会議員のリストを掲載し、議員それぞれについて前回国会議員選挙時の帰属政党の同定を行った。

第2節 複数政党制選挙の軌跡

1 KANUの政権維持装置の中で

ケニアの複数政党制史は独立期にまでさかのぼることができる。そもそも独立時のケニアは、権力分散への強い志向性をもった体制を採用していた。複数政党制だったことに加え、下院の他に各県から一名ずつ選出された議員からなる上院を置くこと、国土を6つのリージョン(Region)に分割し、それぞれに立法、行政(土地問題・治安維持の管轄を含む)、財政に関する執行権を付与すること、憲法改正は上下両院議員の75%の賛成をもって行うが、さらにリージョンの権限に関する条項の改正には上下両院議員の90%の賛成をもってすること、など二院制と連邦制も取り入れられていた。

ただし、この体制は、独立前年に開かれた宗主国イギリスでの憲法制定会議に参加した代表団の妥協の産物として生まれたものにすぎなかった。ケニア側の代表団は、ケニア植民地で開催された複数政党制の下での制限選挙(1961年)で第1党になったKANUと、第2党のケニア・アフリカ人民民主同盟(Kenya African Democratic Union: KADU)⁵を主なメンバーとしていた。権力分散を支持するイギリス側とKADU代表団に対し、KANU代表団は、この当時から独立ケニアに必要な体制は中央集権だと主張していた。結局はKANU委員長ケニヤッタが「望ましくない憲法の受け入れを強制されたとしても、いったん政権を取れば憲法を改正することができる」とKANU側を説

得し、妥協が成立した (Odinga [1967: 229])。

この憲法の下で独立を果たしたケニアは、ケニヤッタの下でまさにこの発言通りの展開を迎えることになる。独立直前の 1963 年 5 月に開催された、初の普通選挙による上下院国会議員選挙および地方議会議員選挙 (独立前であるが、ケニアではこれが第 1 回総選挙とされる) では再び KANU が第 1 党になる。6 月には KANU の暫定自治政府が誕生、初代首相にはケニヤッタが就任し、同年 12 月に正式な独立を果たした。このときケニア国会には KANU、KADU 両党が議席を保有しており (第 1 回総選挙ではさらにアフリカ人民党 (African People's Party) が議席を得たが同党は 9 月に自主解散し、全議員が KANU に移籍した) ケニアは名実ともに複数政党制国家としてのスタートを切っていた。

しかし、この 1960 年代の複数政党制は、スタートの初年から有名無実化への過程を歩み出していた。まず首相のケニヤッタは、唯一の野党となった KADU の国会議員に対しアフリカ人民党の議員と同様に KANU に移籍するよう呼びかけをはじめた。結局 KADU はこれに呼応して自主解散し (1964 年 11 月) 全議員が KANU に移籍、独立後 1 年を待たずにケニア国会の全議席は KANU 一党のものとなったのであった。独立ケニアで採用された憲法は、通常の改正に下院 75%、上院 90%もの賛成を必要とする硬性憲法であった (Okoth-Ogendo [1972: 20])。しかし、体制の大幅変更を妨げるために設けられたこの高いハードルも、全議員が KANU 一党に属する状態の前では無力になった。野党の吸収によって国会を牛耳ったケニヤッタの KANU 政権は、その後短期間の内に数多くの憲法改正を積み重ね、ケニアの複数政党制を批判勢力弾圧の装置へと組み替えていくのであった。

まず 1964 年 12 月、独立一周年記念日に行われた第 1 次憲法改正では、首相制の廃止と大統領制への移行、リージョンに徴税・治安維持・地方議会の設置に関する権利を与えていた重要な条項の大幅な削除が行われた。つづいて 1965 年にかけて第 2 次、第 3 次の憲法改正が行われ、リージョンが廃止されて州 (Province) に改組され、州を含む地方行政が大統領府の管轄と

される一方、 憲法改正の手續そのものが緩和され、すべての改正は全国会議員の 65%の賛成をもって可能になった (Okoth-Ogendo [1972: 19-21])。

このようなケニヤッタ政権による中央集権化に拍車をかけたのはおそらく KANU 内部の急進派勢力の伸長と離党、新党結成という事態であった。当時、土地の再配分の方法、冷戦下での外交政策などをめぐって KANU にはケニヤッタを中心とする主流派と、無償での土地再配分と東側諸国との同盟などを主張する急進少数派の先鋭的対立があった。急進派に対する主流派による締め付けは厳しく、ついに急進派はケニア人民党 (Kenya People's Union: KPU) を結成し (1966 年) 4 月半ばに派閥を率いていた現職副大統領 O・オディンガ (Oginga Odinga) 以下 30 名が KANU を離党し KPU に移籍した。

「 当選時の所属政党を離党した議員が議席を喪失する 」 という新しい規定を盛り込む憲法改正が国会を通過したのは、国会が KPU 結党後初めて招集され、30 名が初めて KPU 議員として国会入りしたその同日午後であった (1996 年 4 月 28 日) 。 当時から憲法改正は国会全議席 (170) の 65% の賛成で成立するようになっていたため、圧倒的少数派の KPU 議員は、KANU 主導の憲法改正の前で無力であった。議員在職わずか 1 日で、翌 1966 年 4 月 29 日に KPU の全議員は議席を喪失したのであった。KPU メンバーの議席喪失後に行われた 30 選挙区に対する補欠選挙⁶の結果、KPU 獲得議席はわずか 9 にとどまり、KPU の弱体化は決定的になった。

ケニヤッタ政権では、急進派弾圧だけではなく、主流派内部における権力抗争も激化していた。たとえばケニヤッタの片腕として KANU の急進派を離党させ、KPU の弱体化を成功させた主流派の T・ンボヤ (Tom Mboya) は、その後 KANU 内での影響力を急激に強め、ケニヤッタとの確執は高まるばかりとなった (ンボヤは第 2 回総選挙の開催予定直前の 1969 年半ばに何者かによって暗殺された。真相はまだ不明である) 。 必ずしも KANU 政権内が一枚岩とはいえない状態の中で、ケニヤッタの主導のもとで 1960 年代のケニア国会ではケニヤッタ個人への - 憲法上では、大統領職というポストへの - 過度な権力集中を進める憲法改正が矢継ぎ早に積み重ねられた。その後強力

な権威主義体制へと歩いていくケニア国家の形がほぼ完成したのはまさにこの時期であった。

大統領制の導入と連邦制の廃止（1964年）が行われたことは上でみたが、さらに1966年には地域の利益代表としての機能を担うはずだった上院が廃止された。大統領個人への権力集中は、公務員や各種行政官の任免権の付与、戒厳令布告権の付与（いずれも1966年）、国会への指名議員枠12名の付与（1968年）、選挙管理委員会の任命権の付与（1969年）などの形で急速に整えられた。その他、1968年の第10回憲法改正では、国会議員選挙への無所属の立候補が禁止され、大統領直接選挙制が導入された。この大統領直接選挙制でも大統領候補となるためには何らかの政党の公認を受けることが要件とされ、無所属の立候補の道は封じられた（同年にはまた、地方議会規約が改正され、同様に無所属の立候補が禁じられている）。

これらの憲法改正には、1969年末の開催が見込まれていた第2回総選挙対策の意味も強くあった。当時唯一の野党だったKPUは第2回総選挙直前の10月末に公共治安維持法（1966年制定）のもとで非合法化されることになる。1960年代を通じて行われた、KANUとアフリカ人民党の2つの野党議員へのKANU移籍の推進、ケニヤッタ政権への急進的批判勢力だったKPUの徹底的弾圧という「アメとムチ」の手段を通じて、第2回総選挙はついにKANU一党しか存在しない状態で執り行われることとなったのだった。あわせて、無所属という形も許さない仕組みが整えられていたため、この選挙はケニヤッタ政権への批判の声を反映させることが極めて難しい状態で行われることになった。結局第2回総選挙では、大統領候補として公認を受けたのはケニヤッタただひとりとなり、本選を経ることなくケニヤッタは再選、国会議員選挙でも立候補者はすべてKANUに所属するという事態になり、当然のことながらKANUは与党の座を維持した。

ケニアが憲法改正によってKANUの一党制に正式に移行するのは、第2代大統領モイの政権下の1982年である。1966年のKPUの「ミニ総選挙」から、その1982年のKANU一党制化に至るまで、ケニアでは形の上では複数政党

制が残されていたものの、大統領選挙で KANU 公認候補への対抗馬は一度も立つことなく、また国会議員選挙の立候補者の所属すべてが KANU という状態がつづいた。1960 年代に整えられた、政権批判を許さない仕組みと、大統領に絶大な権力を集中させる体制のもとで、ケニアの最初の複数政党制は、KANU と現職大統領の政権維持装置が構築される中で有名無実化したのだった。

ケニヤッタ期に始まった大統領一極集中体制を礎に、モイ政権下ではさらに権威主義体制が強化され、1980 年代にはモイ政権に対するチェック・アンド・バランスの公的仕組みはほぼ壊滅状態になっていた。現職閣僚や高級官僚を巻き込む大規模汚職も頻繁に報告されるようになる。この結果、1980 年代の末には政治改革を求める国内の運動が急速に高まった。1991 年にはケニアへの援助供与国と国際機関が一枚岩になって、翌年度の援助供与の条件として政治改革を迫るという展開も起こった。これに対応せざるを得なくなったモイ政権が行ったのが、「ケニアでは KANU を唯一の政党とする（第 2A 条）」とさだめた一党制条項の廃止である。国会議員選挙・大統領選挙など国政選挙への立候補資格要件として KANU への所属を盛り込んでいた規定も合わせて廃止された（1991 年 12 月）。ケニアで 10 年ぶりに再び形式上の複数政党制が回復されたのだった。

この複数政党制復帰を受け、独立後通算第 7 回総選挙（いわゆる「1 回目選挙」）が 1992 年末に開催され、それから 5 年後の 1997 年末には第 8 回総選挙（いわゆる「2 回目選挙」）が実施された。しかし、その内実はまさに 1960 年代の KANU の政権維持装置としての複数政党制の再現に他ならなかった⁷。1991 年 12 月の複数政党制回復を待って、多くの政権批判派の現職 KANU 国会議員が離党し、新設を果たした政党へと移籍したが、この際、離党した議員はかつてのオディンガ以下の KANU 急進派 30 名と同様に、全員が国会の議席を失った。これが複数政党制下での KANU 一党状態 - 空白の 1 年間 - を発生させ、そのことが当時の野党大統領候補を決定的に不利にする新規定を盛り込ませる余地を KANU 政権に与えることになった（後述する）。また大

統領の任命による（すなわち中立性に欠ける）選挙管理委員会のもとでは、KANU主流派に有利なゲリマンダリングが推進された。また、警察官・州県知事など大統領府直属の行政官に移動や集会の自由を制限する権利を与えてきた県行政特別法、辺境県法、行政チーフ権限法など植民地時代に設定され、1960年代のKPU弾圧に「有効活用」された法も1997年総選挙直前まで手つかずのまま存続しており、これらの中で野党側の移動・集会が厳しく取り締まられた。その他、帰属する政治団体が政党であることが国政選挙への立候補の要件とされる中で、政党登録申請の処理を担当する中立な行政組織たるべき結社承認局（Registrar of Societies）が弾圧の道具に使用され、有力な野党勢力の党組織や支部組織の申請が承認されない、あるいは承認の処理が過度に遅延するという事態が頻発した。これに加え国営ラジオ放送局によるKANU翼賛報道、KANUの一部の政治エリートの差し金によって起こされた、「野党支持層」を自選挙区から武力で排除する事件の頻発（いわゆる「民族紛争」⁸）など、枚挙にいとまがないほどの弾圧装置が幾重にも張り巡らされた。野党側勢力は1990年代を通じて不利な選挙戦を戦わざるを得ない状況に置かれてきたのだった。KANUの政権維持装置の中で行われた1990年代の2度の総選挙では、弾圧に苦しむ野党側勢力は四分五裂した。野党側が、全体としては獲得に成功した6割の票を党ごとに分散させるのを尻目に、KANU側はいずれも得票こそ4割とふるわないながらも過半数の議席を維持し（ゲリマンダリングの効果がここに遺憾なく「発揮」されている）大統領選挙でもモイが2度の再選を果たす結果に終わっている。

1990年代の2回の複数政党制選挙そのものについては、国内・国外の選挙オブザーバーの監視の中、投票時、開票時の大がかりな不正は報告されなかった。また一党制期との比較では、秘密投票の復活、複数政党制化があったという意味で政治的自由・参加の度合いが著しく向上したことも確かであり、選挙オブザーバーもこれら選挙に関し「アフリカの基準では自由かつ公正な選挙だった」と一定の評価を下してきた。しかし、1990年代の総選挙における「不自由」と「不公正」は投票時、開票時ではなくその前の段階で徹底さ

れていたのであった。

こうした1991年の複数政党制復帰は、ソ連邦の崩壊を期にアフリカ全体を覆った同時的政治改革の一つであり、いわゆるアフリカ諸国の「民主化」現象の一翼を構成するものである。その形態から見て、1990年代ケニアの複数政党制は、「一党優位体制」(single-party-dominant systems)⁹であり、また政権交代可能性が故意に低められた体制という意味で、前出の「準民主主義体制」(ヤング)、「準権威主義体制」(オッタウェイ)に分類できるだろう(第1節を参照)。

しかし、ケニアに現れたこの体制は、「民主化」によって初めて現れたものではなく、1960年代にいったん完成されたKANUの政権維持装置の再来に他ならなかったこともここでは重要である。それぞれの時期で「欲しいもの」

— 1960年代には「独立」が、1990年代には「援助」がそれぞれ獲得目標だったといつてよかろう — は異なっていたとはいえ、それを与える主体はいずれも国家の外部 — 1960年代の場合は宗主国イギリスであり、1990年代の場合はイギリス、日本、米国をはじめとする援助供与諸国と国際機関 — にあり、そのための妥協の産物として複数政党制の形式が採用され、実際にはできるだけ有名無実化が行われたのであった。2つの時期の複数政党制採用とその形骸化の文脈には、興味深い類似性がみられる。

2 「3回目選挙」の成功

KANUの政権維持装置を崩すには、憲法をはじめとする関連法の改正が必要であるということ、そして弾圧の中でさえ常に6割の票を得てきた野党側はおそらく勢力の結集さえ達成すればKANU政権を終焉させられるということ — 1990年代の10年間は、一方で野党政治エリートの側の、他方で選挙民の側の双方にとってこれらを学ぶ「学習」の期間として働いたといえる。

ついに関連法の大規模な改正が行われたのは1997年11月であった。選挙管理委員会の中立化、大統領に付与された12名の国会議員指名権の事実上の

剥奪（国会での議席数に応じて与野党各党に指名枠が割り当てられ大統領はそれらを承認するのみとなった）行政チーフ権限法や公共治安維持法など集会、結社、移動の自由を制限を加える機能を果たしてきた法制度が廃止あるいは修正されたのである¹⁰。ただしこれらの改革は、1997年総選挙には「間に合わなかった」といえる。改革のタイミングは1997年総選挙実施（12月）のわずかひと月前であり、そのとき既に選挙区再画定は終了、政党登録申請の承認を引き延ばされていた新党の不利も決定的なものとなっていた。1997年総選挙は引き続きKANUの政権維持装置の中で戦われたと判断すべきだろう。

とはいえ、このいわば「第2弾」の法制度改革により、KANUの政権維持装置にゆるみが生じたことは間違いない。そのゆるんだ政権維持装置を決定的な機能不全に追い込んだのは、当時の現職大統領モイを中心とするKANUの一部が試みた大統領後継にまつわる勢力拡大工作と、その失敗である。もう少し詳しく見ていこう。

独立以来のケニアでは、大統領選挙が行われてはきたものの、無投票（1969～1991年）あるいは「出来レース」（1992～1997年）にとどまってきた。これを変えたのが、1991年末の複数政党制移行のための憲法改正において差し挟まれた大統領の3選禁止の規定だった。1990年代の大統領選挙で連続して二度当選したモイから、2002年末に実施が予定されていた大統領選挙への立候補資格をこの条項が奪ったのである。3選を可能にするには憲法改正が必要という状態であったが、当時の国会におけるKANUの「実効」保有議席（KANU議員の一部は激しい執行部批判を繰り返すなど既に離党状態にあった。後述する）は、KANUと共同歩調をとっていた野党側の数政党を合わせても憲法改正に必要な国会65%には届かなかった（津田[2003b: 104]）。モイが選んだのは、自身の引退と後継「指名」－自分の好む人物をKANUの大統領公認候補にすること－の道であった。KANU議員の一部を中心に、モイの大統領就任期間の延長が繰り返し提唱されたが、モイはそうした動きを諫め、次回大統領選挙までまだ間がある1999年の段階で引退表明を行い、そ

の後も引退の立場を堅持したのである。

このモイの選択によりケニアは、2002年に予定された総選挙において、選挙で大統領を交代させるという初めての事態に直面することになった。1997年から2002年までの期間はこうして、KANU各派によるモイ後継の指名争いが激しさを増す一方で、その大統領公認候補の当選と政権の存続を目指してKANUによる積極的な勢力拡大工作がはかられる5年間になった。

KANUによる勢力拡大工作は、具体的には国家開発党(National Development Party of Kenya: NDP)との合併という形でいったん結実した。NDPは当時の国会第3党であり、委員長のライラ・オディング(Raila Odinga。父親のオディングと区別するため、以下ライラと呼ぶ)以下、議員の圧倒的多数はニヤンザ州出身であり、同州ではカリスマ的政治指導者であったオディングの死(1996年)後その地盤を引き継ぐ形で短期間で同州での強固な支持基盤を築いた新興政党だった。KANUとNDPは法案採決における協力、NDP国会議員4名の内閣入り(2001年6月)を経て、2002年3月のKANU党大会で正式に合併、元NDP委員長のライラは新たにKANU書記長に就任した。この合併により、2002年前半のケニアでは、KANU優位の図式がいったん成立することになったのだった。

しかし、この勢力図はその年のうちに大きく変容することになる。1990年代の複数政党制選挙とは逆に、2002年選挙には野党側が初めての大規模な選挙協力に成功する一方で、KANUが分裂するという事態に立ち至ったのである。KANU分裂の直接のきっかけとなったのは、2002年8月にモイが当時若干40歳のウフル・ケニヤッタ(Uhuru Kenyatta。父親のケニヤッタと区別するため、以下ウフルと呼ぶ)を大統領後継に選んだことであった。ウフルはケニヤッタの実子としてのネームバリューこそあれ、本人には当選歴がないどころか、地元から初出馬した1997年国会議員選挙で大敗するという芳しくない過去をもっていた(Verdier (ed.) [2001: B-55])¹¹。

モイがウフルを選んだことに対するKANU内部の離反は速かった。四分五裂する野党勢力の間で幾度も所属党の解体と再編を率い、常に国会で主要政

党としての勢力を獲得し続けてきたライラをその内部に取り込んでいたことが、「拡大」したはずのKANUを中心から分解させる結果を呼んだのであった。ライラは、ウフルの後継「指名」を不服とするKANU内部の不満を結集するに躊躇せず、最終的にKANUからの分離へと批判派を率いた。ライラはまず、党の大統領公認候補を決定する次回KANU党大会において拍手による承認でなく秘密投票を求めるという運動 - 秘密投票であればウフルの公認当選はあり得ないとの見込みがその背後にある - をおこした。この運動に元NDP国会議員だけでなく、1997年総選挙後に副大統領をいったん解任されるなどモイとの関係悪化がささやかれる中、モイを批判する発言を避け、「寡黙な」ナンバーツーとして知られてきたG・サイトティ(George Saitoti)をはじめ、NDPとの合併で要職を追われたばかりだった前KANU書記長J・カモソ(Joseph Kamotho。サイトティと同じく書記長在職中はモイへの忠実さで知られた人物であった)、大統領府国務大臣W・ンティママ(William ole Ntimama)、大統領府副大臣F・グモ(Fred Gumo)などが立場の違いを乗り越えて次々と加わった。運動の参加者たちの自称である「虹の連合」(Rainbow Coalition。以下、レインボーと呼ぶ)には、そうした様々な派閥が奇跡の連合をおこしているとの自負にも似た現状認識がかいま見える。モイ政権下での汚職や景気低迷などへの不満を抱える都市民や高学歴層、野党支持層の間でもレインボーの動きは快挙と受け止められ、都市部、マスメディアを中心に、支持を表明する動きが急激に高まった。

こうしてモイによる「後継指名」(2002年8月)を境に、KANUは、ウフルを後継に推すモイ派とそれに難色を示すレインボーの2派への分裂という坂道を転げ落ちていくことになった。同月のうちにモイは、レインボーの一部について降格を断行する。ライラやンティママらレインボー中枢メンバーとは引き続き次回党大会での大統領公認候補選びに向けての話し合いが続けられるが、結局合意は成立せず、党大会は2度の延期の果てにレインボー賛同者の欠席の中で断行(2002年10月14日)される顛末となったのであった。レインボーを欠いたことで、「残存KANU」は、マージナル化を余儀なくさ

れていくことになる。

1990年代の10年間は、おそらく勢力を結集さえすればKANU政権を終焉させられるだろうということを野党政治エリートが学ぶ期間として働いたであろうことは前に述べた。KANU分裂を尻目に、大同団結を成し遂げたのはまさにその野党勢力であった。NDPからの閣僚登用(2001年6月)によってKANUが勢力拡大に向かっていた頃、他の有力野党の間では、次回総選挙における野党同士の選挙協力が1990年代以上に本格的に模索されはじめた。交渉の中心は、国会第2党のDP委員長キバキと、同じく第4党のFORD-ケニア委員長M・ワマルワ(Michael Wamalwa)そして第5党のSDP主流派(後述する)を率いたC・ンギル(Charity Ngilu)の3名であった。

選挙協力を模索しつつもなかなか合意の成立しなかった野党勢力から、ついに統一候補の名前が挙がった(2002年9月)のは、ちょうどKANUがウフルの後継「指名」をめぐる分裂に直面しはじめた時期にあたる。野党側の選挙協力組織の名としては、ケニア国民連合(National Alliance of Kenya: NAK)が発表され、大統領選挙統一候補をキバキとすること、キバキは当選後の組閣でワマルワを副大統領に指名すること、首相制導入が予定される新憲法の制定後(現行憲法では首相職は存在しない)にンギルを首相に就任させることが約束された。

引き続きKANUが分裂必至の形勢を強める中で、NAK側は、KANUが大統領公認候補の選出を行う党大会開催日の当日に大規模な政治集会を開く計画を打ち出した(会場はナイロビのウフル・パーク)。上述したように結局レインボーとモイ派の合意形成は成らなかった。2002年10月14日、ウフル・パークには、キバキらNAK中核メンバーだけでなく、レインボーのメンバーが合流した。その中には、大臣職やKANU中央執行委員職を辞職してKANUからの分離の意思を表明したライラら、モイの降格人事を免れていた中核6名¹²が含まれていた。集会の席上、NAKらは、選挙協力組織NARC(NAKとレインボーの頭文字を合わせた名称である)の結成と、レインボーのLDPへの政党化を発表し、来る総選挙に統一候補をたてると宣言した。KANUにとって

最大の打撃となる、ケニア史上初の大規模野党連合の成立であった。NARCは、その後一部が脱退したものの、政党登録を経て、キバキを大統領選挙の統一候補として公認したほか全 210 の国会議員選挙区のうち 208 選挙区で公認を出馬させた。結局 2002 年 12 月 27 日に実施されたケニア第 9 回総選挙でキバキは 6 割を超える得票率で大勝、国会議員選挙でも NARC は全体の 6 割にあたる 125 議席を獲得して、第 2 党となった KANU の 64 議席を大きく凌駕し、政権党の座に着いた。

ケニアはこうして、見事に「3 回目選挙」をこなして現在に至っている。KANU 分裂による KANU 残存勢力のマージナル化と元 KANU 議員の野党側への大量移籍、野党側の選挙協力の達成という事態を受けて、2002 年総選挙に関してはそれまでの KANU の政権維持装置はほぼその機能を失い、選挙の結果として政権交代も発生した。1997 年総選挙以後のケニアは、1960 年代と 1990 年代の「一党優位体制」 - あるいは「準民主主義体制」「準権威主義体制」 - が指定してきた型の外へ、いわば「ポスト一党優位体制」へと漂い出つつある。

第 3 節 ケニア的複数政党制へ

1 政党機能の「歪み」

1997 年総選挙を終えたあとのケニア的複数政党制 - とりあえずこれを「ポスト一党優位体制」と呼ぼう - は、権力分散への志向性を強く持つ新憲法制定にまつわる問題、土地問題や複数政党制化で深刻さの度合いを深めた「地元民」「よそ者」対立の問題など多岐にわたる重大なイシューを内包している¹³。この小論ではそのすべてを検討することはできないが、NARC 政権の「DP 政権」化という展開に鑑み、「ポスト一党優位体制」ケニアの重要な特徴の一つである政党機能の「歪み」ともいうべき、政党という団体の

役割の変質ぶりを検討していこう。

政党研究によってこれまで考えられてきた政党の役割・機能としては、利益集約にもとづく政策形成、政治的指導者の選抜と政府の形成、人材発掘などがある¹⁴。これに対し、2002年総選挙に向かうケニアの「ポスト一党優位体制」で生じたのは、政党が団体としてのほとんどの機能を失って、かわりに大統領・国会議員・地方議会議員候補の、選挙における（また選挙後の多数派工作における）バーゲニング用の乗り物と化す傾向であった。

「一党優位体制」下のケニアでも確かに所属政党を移籍する議員は少なかつた¹⁵。表1は、この時期の移籍ぶりを示したものである。1997年国会議員選挙当選者210名のうち、「前回」国会議員選挙（1992年末実施）での所属政党が判明したのは102名、うち政党を移籍した者は約2割（27名。うちKANUからその他政党へ、その他政党からKANUへの移籍を行ったのが10名、野党間の移籍が17名）にのぼる。しかし、その他の圧倒的多数（102名中79名。約8割。うちKANU議員47名、その他野党議員32名）は、1992年と1997年の国会議員選挙で同じ政党に所属している¹⁶。1990年代の「一党優位体制」では、党籍の移動はマージナルな現象にとどまっていたといえる。

ところが、この傾向は、「ポスト一党優位体制」期に入ると一変する。表2は、2002年国会議員選挙の当選者について表1と同様に「前回」国会議員選挙（1997年末実施）での所属政党を調べたものである。所属政党が判明した126名のうち、マージナルな側になったのは、今度は党籍の移動をしなかつた議員たちである。KANUにとどまったのはそれでも126名中29名（2割強）いたものの、その他の政党に所属する議員で党籍の移動が全くなかつたのは126名中わずか4名（3%）にすぎなかつた。

一方、KANUからの出入りは「一党優位体制」期のそれを遙かに上回る46名（126名の4割弱）にのぼった。また、傘下政党からNARCへの公認政党の変更を含んだその他の政党間での党籍の移動は47名（同じく4割弱）となった。何らかの形で前回選挙時と党籍を変更した議員は126名中93名（7割強）と多数派に転じたのである。ちなみにこれは、全国会議員210名の中で

も4割強を占める、少なくない数値である。

例として、与野党の激戦地域のひとつ、イースタン州南部20選挙区を見よう(表1、表2の選挙区番号で57~76)。この地域における1997年国会議員選挙での政党別の獲得議席は、KANU(当時の与党)が9、SDP、DPなど野党(当時)が合わせて11という内訳であった(表1)。2002年国会議員選挙でここは、まさにイースタン州南部の出身であるンギルがNARC中核の一翼を担い、政権獲得後の首相ポストを約束されていたこと、ウフルの大統領候補公認を嫌ってKANUを離党したK・ムシオカ(Kalonzo Musyoka、レインボー中核メンバーのひとり。KANU在籍中は環境情報大臣だった)の出身地でもあったことなどから、NARC公認を得ることが国会議員選挙でも当選の近道と考えられる状態になっていた。KANUの公認を得ることがすなわち不利に働きかねない状況の中で、政治エリートたちは1997年と2002年とで所属政党を大きく変えている。

まず、KANU現職議員10名¹⁷全員が2002年国会議員選挙にも出馬しているがKANUの公認を受けたのは6名にとどまった(うち2名が再選、4名は落選した)。残り4名は、NARCの公認を受けて出馬した(いずれも再選)のだった。このほか、キトゥイ(Kitui)県のキトゥイ・ウエスト選挙区(Kitui West、選挙区番号62)でも、元大臣でKANU所属(1997年国会議員選挙には出馬せず)のN・ムウェンドウワ(Nyiva Mwendwa)がNARC結成直後にLDPへの移籍を発表、NARC公認を受けて出馬し、当選している。また、2002年国会議員選挙で再選を果たしたSDP、DP現職議員4名も、全員がNARC公認を得る形で出馬している。

ここで重要になってくるのが、2002年国会議員選挙時におけるそれら「政党」の希薄な実体である。「一党優位体制」下での野党が四分五裂してきたことは述べたが、「ポスト一党優位体制」期の政党の離合集散ぶりはその比ではなかった。KANUによるNDPの吸収、レインボーの形成とKANUからの離党という当初の大きな動きの他にも、たとえばSDPは、1997年総選挙のあと内部抗争を激化させ、2002年までに分裂状態に陥った。委員長ンギル以下相当

数がまず、ンギルが委員長就任を表明したケニア国民党（National Party of Kenya: NPK。政党登録は未申請とみられる）に事実上「移籍」した。ンギルら国会議員は形式的には総選挙までSDP議席を保っていた（形式的な議席保持については次項で述べる）ものの、NPKとしてDP、FORD - ケニアとともにNARCを構成することになる。一方、SDP残存派でもさらなる内部抗争が展開した。うち、大統領候補公認をめぐるンギルと長らく争っていたSDPの大統領指名議員P・アニヤングニヨンゴ（Peter Anyang'-Nyong'o）をはじめ大勢はNARC前身の選挙協力組織NAKへの参加を支持、最終的にはNARCに参加した。他方で、大統領候補としてSDPから選挙に出馬することを望んだJ・オレンゴ（James Orenko。1997年国会議員選挙時はFORD - ケニア議員として当選）とそれを支持する政治局のA・ンジョンジョ（Apollo Njonjo）は選挙協力を否定、裁判闘争で勝利してSDPの執行部の担い手としての正統性を獲得し（*The Daily Nation*, "Polls body recognises Orenko's SDP group", 2002年11月5日付）、2002年総選挙ではSDPとして独自候補を擁立した¹⁸。

こうした各政党の分裂・統合とは別に、さらに大枠でも野党勢力のアンブレラ組織NAKに、KANU離党組が結成したLDPが合流、NARCが誕生するという急激な流れが起こったことは既にみたとおりである。各政党の組織再編が追いつかないうちに2002年総選挙は行われたのだった。NARCに至っては、傘下の政党はすべてそれまでの執行部や支部の体制、メンバーシップを維持したままとなっており、参加政党の長による合議制をとることが決められていただけで、NARC自体には政党としての支部も確固たる党員のメンバーシップもなかった。政党登録申請が受理されたという点を除いては、NARCは既存政党のアンブレラ組織以上の実体をもたない組織であり続けてきたのだった。ある候補者が立候補に際してどの政党に属しているかということの持つ意味は、どの政党の公認を得たかということ以上でも以下でもなくなったというのが2002年国会議員選挙の実施当時の状況だったのである。

ただし一方で重要であるのは、政党が実体を失う状況の中でも、選挙民の投票は単に候補個人への支持表明としてではなく、少なくとも「NARCか非

NARC か、KANU か非 KANU か」という範囲での「政党」に対する明確な選好が反映されたものだったと考えられる点である。2002 年総選挙では、KANU には約 3 割の、NARC には 6 割強の投票が寄せられた。先ほど例にとったイースタン州のムインギ、ンベエレ両県以南でも、1997 年国会議員選挙時の党勢は KANU9、野党 11 だったのに対し、2002 年国会議員選挙時の党勢は KANU がわずか 2、NARC が 16 となっており、NARC が明らかに党勢を大きくのばしている。NARC に移籍した KANU 現職国会議員は、全員が当選を果たしていたことも想起したい。

ここに現れているのは、政権は「政党」 - どのような実体のものであれ - が担うという仕組みと、政党の希薄化の並存という大きな矛盾である。独立した既存政党のアンブレラ組織にすぎないとはいえ、NARC が政党として登録されており、候補者が DP や LDP でなく NARC の公認を得るという形で出馬した以上、選挙民には NARC 傘下の各政党についての選好を示す余地はなく、NARC に投票せざるを得ない。政権交代を果たした NARC はまた、実体がなくとも政府を構成する「政党」となる。

選挙民の多くの票を「集めて」政権交代を達成した NARC であるが、NARC は果たしてどのような利益を代表しているのか、あるいは代表すべきなのかという問いは、自由で公正に実施された普通選挙を経て（いや、経たからこそ）なお、極めて曖昧なままに取り残されることになっている。政権獲得後の NARC 政権の実際の運営ぶりまで含めるなら、2002 年総選挙での選挙民の参加の度合いは極度に限定されていたとさえいえる。既に政権誕生 1 年を待たずして、冒頭で触れたように、DP を中心とする偏向した運営が「NARC」の名の下で横行しているとの批判が拡がりつつある¹⁹。これが「一党優位体制」の 1990 年代を経て、「ポスト一党優位体制」に入った 2000 年代に展開されているケニア的複数政党制の一つの顔なのである。

2 機能変化する法制度

「ポスト一党優位体制」に踏み出したケニアで生じているこうした事態には、国政選挙や国会の議席にかかわるいくつかの法制度の存在もまた、重要な役割を果たしている。注目すべき特徴は、そのいずれもが導入時の意図は「民主化」にも、政党の希薄化にもなく、むしろ政権への批判勢力の弾圧装置としての、また与党の重要性を増す仕組みとしての働きが期待されていたということである。

政党の離合集散による多数派工作がモイの引退表明後に集中的に展開した背景には、大統領選挙における「5州25%ルール」と呼ばれる当選要件（憲法第5条）がある。これは、得票数一位であることに加え、ケニア全8州の6割以上にあたる5州でそれぞれ州ごとの全得票の25%以上を獲得することを大統領選挙での当選要件としたものである。

1990年代の「一党優位体制」のもとで野党各党は、派閥抗争による分裂、政府による厳しい弾圧の影響を受けて、その多くが地域政党としての性格を帯びるに至っていた²⁰。ただし、野党勢力は、ナイロビ、コースト州モンバサなど都市部とセントラル、ニャンザ、ウエスタンの各州すなわち人口稠密な地域で圧倒的支持を得る傾向にあった。得票数だけの単純な比較であれば、現職モイを上回る野党大統領候補が現れる可能性が残る状態だったといえる。モイのKANU政権が急ぎこの「5州25%ルール」を憲法に挟み込んだ（1992年8月）のは、国会の100%がKANU議員になるという、通常はハードルの高い憲法改正が容易に可能となった空白の1年間（第2節の1を参照）のことであった²¹。

綱領とは無関係に地域政党の色彩を帯びざるを得なくなっていた野党各党にとって、この全国でまんべんない支持を得られなければ大統領に当選できないことを定めた「5州25%ルール」は、当時の文脈では弾圧装置のひとつに他ならないものであった。1992年、1997年の大統領選挙では、実際に、このルールを満たすことに成功したのは現職のモイただひとり（5州獲得）で

あった。泡沫候補はいうに及ばず、1992年大統領選挙では、次点のK・マティバ（Kenneth Matiba）が3州、3位のキバキはわずかに地元セントラル州でのみ25%以上の獲得に成功するとどまった。1997年大統領選挙でも、次点のキバキは総得票率では9ポイント差とモイに迫ったものの25%以上の獲得州は地元セントラル州と隣接のイースタン州の2州のみであった。3～5位の候補については、25%以上得票できたのはいずれも候補の出身州のみだった（高橋[1998: 89]）。「一党優位体制」時代のケニアで、このルールは、モイの再選装置としての機能を果たしてきたのだった。

ただし、この同じ「5州25%ルール」は、KANUの勢力が縮小する1997年総選挙以後は、KANUにとってもその大統領候補の当選を難しくする高いハードルに変わった。有力な大統領候補が複数立候補する状態では、単独の政党が「5州25%ルール」を満たすことが難しい（1政党が公認できる大統領候補は1名）ということは、1990年代の複数政党制大統領選挙の結果から明らかだった。「5州25%ルール」の存在が、NARCという大規模な選挙協力組織を誕生させた原動力の一つだったことは疑いない。上述したように、NARC前身のNAKは、それまで大統領候補になってきた主力政党の委員長たちが選挙前に協定を結び、統一大統領候補を決めることで成立した組織だった。キバキを大統領候補とすることと抱き合わせに、FORD - ケニア委員長のワマルワを副大統領に、NPK委員長のンギルを後に首相ポストに就かせることで合意が成立したことは既に述べたとおりである。NARCへの拡大改組の際にも、KANU離党組のリーダーだったLDP委員長のライラについて、何らかのポスト配分に関する合意があったとされる（津田[近刊]）。「5州25%ルール」は、野党弾圧という導入時の機能を既に果たすことをやめ、「ポスト一党優位体制」ケニアにおいては、政治エリートを党派を超えた協定へと向かわせる働きをしているのである。そしてこの政治エリート間の協定が、前段でみたように、政党の実体を薄れさせ、選挙民の選好表明の機会を実質的に減らし、NARCへの投票がNARC内でのその時々主流派（たとえばDP）への実質的な白紙委任状と化す結果をもたらしているのだった²²。

同じように、憲法上にある別の規定群が、やはり政党の持つ意味を薄れさせる働きを果たしている。一つが、国会議員選挙への無所属の立候補を禁止した条項(憲法第34条) もう一つが国会議員選挙時の所属党を離党した(あるいは除名された)議員は議席を喪失するとした条項(憲法第40条)である。この2つの規定は、1990年代の政治改革とは全く関係のない文脈において、独立間もない初代ケニヤッタ大統領のもとで導入されたものであった。

第2節で振り返ったように、ケニヤッタ政権下では、所属党を離党した議員が議席喪失するとした規定も、国政選挙への無所属の立候補を禁止した規定も、いずれも導入の意図を「正しく」反映して、ケニヤッタ政権批判の封じ込めと権威主義体制の確立に大きく貢献していた。ケニヤッタ政権期の複数政党制だけでなく、モイ政権期に回復された複数政党制においても、当初はこの規定は「正しく」機能していたといえる。1991年12月の複数政党制回復を待って、多くの政府批判派の現職KANU国会議員が離党し、新設を果たした政党へと移籍していったが、この際離党した議員は全員が国会の議席を失った。これが複数政党制化でのKANU一党状態 - 空白の1年間 - を実現させ、そのことが当時の野党の大統領候補を決定的に不利にする規定「5州25%ルール」を盛り込む憲法改正を可能にしたことは上で見てきたとおりである。

この離党すると議席喪失、という規定を形骸化する動きが頻繁に観察されるようになったのは、1997年総選挙後のことであった。与党KANU、野党各党を問わず、路線の違いや大統領公認をめぐる確執などから公の場で執行部を批判したり、国会での法案採決で主流派と異なる投票をしたりといった議員が増加しつつも、離党して補欠選挙に出馬するケースが激減したのである。国会第2党だったDPでは、N・カルメ(Njenga Karume)とK・キマニ(Kihika Kimani)が、親モイの立場を明らかにし、モイの意向に添う形で各種会合を繰り返し主催しつつも、DP国会議員としての地位を保ち続けた。与党だったKANUにも、内部批判を繰り返し、諸野党への「精神的な移籍」を表明しながら党にとどまり続け、2000年12月に一斉にKANU停職処分を受けた者たち

がいた。S・ニャチャエ (Simeon Nyachae。2002 年大統領選挙に別政党²³の公認を受けて出馬、落選) K・キルワ (Kipruto Kirwa。2002 年国会議員選挙ではNARC公認を受けて出馬、再選²⁴) K・コーネス (Kipkalia Kones。2002 年国会議員選挙ではFORD - ピープル公認を受けて出馬、落選。同党の指名議員となった) A・キメト (Anthony Kimeto。2002 年国会議員選挙では再びKANUの公認を受けて出馬、再選) S・ジロンゴ (Silas Jirongo。2002 年国会議員選挙では再びKANUの公認を受けて出馬、落選)らである。さらに、上述したNPK委員長ンギルもSDPに「形式的に」在籍しつつも「次回総選挙では新党NPKから立候補する」と公言して (2001 年 6 月 24 日) 2002 年 10 月の国会解散までSDPの議席を保っていた (*The Daily Nation*, "Ngilu says no to Moi." 2001 年 6 月 25 日付) また、事実上SDPに「移籍」してSDP委員長 (National Chairman) への就任を宣言したオレンゴ (*The Saturday Nation*, "Orengo is picked SDP chairman." 2001 年 10 月 13 日付) も、1997 年国会議員選挙当選時のFORD - ケニア国会議員という地位を維持し続けた。

こうした国会議員の議席に関する「脱法行為」を可能にしたのは、第 1 に政治改革が叫ばれる中でKANUをはじめとする各党が党内批判者に対する除名処分を控えるようになったこと²⁵、第 2 は、国会議長への離党通知があつて初めて国会議長が当該議席の空席化を宣言できるという手続きの存在を逆手にとって、実体はともかく国会議長への離党通知は行わないことで議席喪失を回避するという「手法」がいつしか編み出されたことであった。上述の議員たちは、いずれも当選時の所属政党からの除名処分を免れつつ、国会議長への離党通知も行わないことで、国会議員としての地位を維持し続けた。離党すると議席を喪失するとした規定、そして無所属の立候補を禁じたもう一つの規定が相俟って、国政選挙を志向する政治エリートにとって何らかの政党への帰属が不可欠となり、そのことで逆に政党そのものの実体の希薄化が進んでいるのである。

KANU (主流派) への批判勢力を弾圧する装置として導入された経緯を持つ「5 州 25%ルール」, 「離党議員の議席喪失」, 「無所属立候補の禁止」の 3

つのルールは、こうして「ポスト一党優位体制」のケニアでまったく新しい機能を帯びるに至っている。「民主化」の重大な要素に制度改革があることは言を待たないが、上述の事例は、制度そのものの検討では把握の難しい領域があることを明らかに示している。現実の政治情勢の変化 - ケニヤッタとモイによるKANU政権維持装置の構築・強化期から同装置の機能停止と政権交代の成立まで - の影響を受けて、同じ制度の果たす機能は180度転換してきたのである。

第4節 おわりに

必ずいずれかの政党に所属しなければ政府・国会での活動ができないという法制度枠組みのために、ケニアの政治エリートたちは何らかの政党への帰属そのものには固執せざるをえないが、政党への「形式的」帰属という手法が編み出された「ポスト一党優位体制」ケニアでは、政党への依存度は低い。他方で大統領選挙での厳しい当選要件を満たすために、政治エリートたちは所属政党を超えて他のエリートと協定を結ぶ必要に迫られがちである。派閥抗争や事実上の離党者を内部に抱えることで中身を薄れさせつつも、総選挙に向かってそれら政党は、多数派工作に邁進することになる。こうしてつくられた急ごしらえの大政党や事実上アンブレラ組織にすぎない新「政党」もまた、その政党としての実体の薄さを免れ得ない。「ポスト一党優位体制」のケニアでは、政党はまさに構造的にその実体を曖昧化させてこざるを得なかったとさえいえる。

2002年総選挙直前に誕生したNARCはその結晶だったのかもしれない。25年にわたって続いたモイKANU政権(と「後継指名」を受けたウフル大統領候補への)批判票を結集する形でNARCは、大統領と国会過半の議席を得て政権交代を成し遂げた。しかし、選挙民の政治参加が「届いた」のはそこまでであった。政党としての実体が極端に薄かったNARC「による」政権運営

は、既に早期のうちに大統領キバキの所属政党である DP 色を強めつつある。NARC 内でもこれに対する反発は高まる一方であり、一部が野党の KANU との協力関係を探り始めるなど、NARC への「形式的」帰属がはやくも始まりつつある。

政治エリートたちが政党という枠組みを手がかりに激しい離合集散を繰り返す政治史を観察すれば、一見ケニアの複数政党制において政党という団体が重要な機能を果たしているかに見えがちであるが、実態はより複雑である。政党がなくてはならない帰属団体となっているが故に、逆に政党の持つ意味が低下するという現象が起きているのであった²⁶。

1991 年末の KANU 一党制条項の廃止を境にケニアは「民主化」の季節に入った。しかしそれは、1960 年代に妥協の産物として採用された形だけの複数政党制 - KANU の政権維持装置としての「一党優位体制」 - の再来であった。しかし、この KANU の政権維持装置は、1997 年総選挙とその後のモイによる引退表明によってその機能を停止させ、選挙による政権交代が成立、世紀をまたいだケニアは「ポスト一党優位体制」へと漂出しつつある。本稿で検討した政党の意味の重大化と、そのために逆に生じている組織としての政党の希薄化という現象は、この「ポスト一党優位体制」にあるケニア的複数政党制を読み解く一側面であろう。いままさに展開を遂げつつある進行中の体制であるこの体制について、今後さらにその具体的内容を把握し、記述と分析を積み上げる作業の礎石の一つと本稿を位置づけ、まずは筆を置くこととしたい。

注

¹ 現キッチン・キャビネットの構成員には、キバキの他、ムルンガル(本文で後述する)、K・ムルンギ(Kiraitu Murungi。憲法大臣)、D・ムウィラリア(David Mwiraria。大蔵大臣)、M・キリリ(Matiri Kiriri。大統領官邸会計監査役兼大統領私設秘書。ただし 2004 年 1 月

に解任)らが含まれる(ナイロビ大学開発研究所上級研究員Dr. Karuti Kanyingaへの2003年10月13日実施のインタビュー)。

² これについては津田[近刊]で取り扱っているので参照されたい。

³ 通常「民主化」は、「民主主義へと向かう過程全体」(Whitehead[2002:27])の意で用いられ、本稿もそれに従う。また「民主主義」については、さしあたりダール(Robert A. Dahl)に従い、公的異議申し立てを可能にする政治的自由があり、政治参加の包括性を保証する公正で広範な選挙が定期的に行われている政治体制を民主主義(体制)と呼ぶことにしたい。しかし本文で後述するように、本稿はケニアで成立しつつある政治体制を単に「民主主義」と分類することには一定の距離を置くことが必要だと考えている。そうした注意を喚起する意味をこめて、「民主化」の用語についてはとりあえず括弧付きで用いることとする。なお、民主主義の概念論争を広範かつ詳細に整理したWhitehead[2002:6]には、この概念には「水には浮かんでいるものの錨が降ろされているような」定義が望ましいとの至言がある。その「錨」にあたるのが民主主義にとってのいわゆる手続的最低条件(procedural minimum conditions)であろう。もちろんこの「手続的最低条件」の内容に関しても諸説がある。たとえばHarbeson[1999:40]の整理を参照されたい。

⁴ 言うまでもなく、その代表はBratton and van de Walle[1997]である。本稿で取り扱うケニアについては、たとえば1回目選挙を検討したBarkan[1993]、2回目選挙を扱ったBratton[1998]などがある。

⁵ KADUは第2党にはなったものの、KANUが政権担当をボイコットしたために政権を担うことになった(1961年4月)。KANUのボイコットは、当時獄中にあったケニア独立運動の中心的存在ケニヤッタの釈放を求めてのものであった。このため選挙では敗れたKADUが他の小政党と協力して連立内閣を発足させたのであった。

⁶ 通称ミニ総選挙(Little General Election)。1966年6月開催。

⁷ 1990年代のケニア総選挙における野党側への弾圧については、津田[2001a](特に第2節)でも整理したので参照されたい。

⁸ 選挙活動としての「民族紛争」については、津田[1999;2000;2003a;2003c]で詳述したので参照されたい。

⁹ 「一党優位体制」の特徴としては、憲法的には複数政党制を維持しながら、複数政党間の競争が現実には起こりにくく、政権党が議会の圧倒的多数の議席を確保していること、さらに、政権党と政府の組織的境界が曖昧であり、人事的にも重なり合っていること、政権党が政策立案機能を失い、大統領府が政策の立案・決定を主導する傾向がある、政権党が政府の下部組織となり、利益集約と利益表出の機能を失っている、草の根への浸透・教育・監視に政府が政権党を使用すること、などが挙げられる。(遠藤[1996:227]、Widner[1992:2-7])。

¹⁰ このときの法制度改革について、詳しくは津田[2001a:114]を参照されたい。

¹¹ このときなぜモイがウフルを後継に選んだかについて、津田[2003b]において、いわゆる「ケニヤッタ後継」との関連から考察を試みた。参照されたい。

¹² 6人の顔ぶれは、ライラ(エネルギー大臣、KANU書記長。いずれも2002年10月以前のKANU在籍中の役職。以下同)、ムシオカ(本文で後述する。環境情報大臣、KANU副委員長)、O・オジョデ(Orwa Ojodeh。教育省副大臣)、A・アウィティ(Adhu Awiti。国

家経済計画大臣)、ンティママ(大統領府国務大臣)、H・アウォリ(Horace Awori、教育省副大臣)。なお、津田[2003d: 24]に「ライラら「レインボー」の中心メンバー4名が」とあるのは「6名」の誤りであった。記して訂正したい。

¹³ 新憲法制定に関する2000年までの経緯については、津田[2001b]で跡づけた。また「地元民」「よそ者」対立については、津田[2003a; 2003c]で考察したので参照されたい。

¹⁴ 伊藤他[2000: 195]の整理による。政党の機能としてはこのほか、利益表出、国民の政治教育があげられている。

¹⁵ たとえば、コースト州国会議員のR・シャコンボ(R.S. Shakombo)など数名は選挙のたびに所属政党の移籍を数回にわたって繰り返すことから「多重政党移籍者(multi-defector)」と呼び慣わされている。本章末の表1、表2からもその一端を読み取ることができる。また1992年総選挙に関する政党移籍者に関しては、たとえばThroup and Hornsby[1998: 636]を参照されたい。

¹⁶ 検討の対象を1997年国会議員選挙での次点候補まで広げても、傾向はほぼ同様である。次点候補193名のうち1992年総選挙時の所属が判明したのは59名、うち何らかの移籍を行ったのが22名(4割弱)だったのに対し、残る37名(6割強)は移籍を行わなかった。

¹⁷ 新たにこの地域でKANU国会議員となっていたキトゥイ・サウス選挙区(Kitui South、選挙区番号65)国会議員S・キミンザ(Samuel K. Kiminza)を含む。キミンザは1997年国会議員選挙ではSDPの公認を得て当選した。しかしその後1999年2月にSDPを離党してKANUに移籍、議席を喪失したものの、続いて開催された補欠選挙(1999年4月)にKANUの公認を得て出馬し、再選を果たした。

¹⁸ オレンゴとアポロは、SDPの看板こそ背負い続け独自候補を擁立したものの、「オリジナルな」SDPに比して2002年総選挙時のSDPはマージナルな残留部分にすぎないものとなっていた。オレンゴはSDP公認候補として大統領選挙に出馬し、1%に満たない得票で惨敗しただけでなく、長らく議席を保ってきた地元ウゲニヤ(Ugenya)選挙区でも落選した。ンジョンジョも国会議員選挙に初出馬したが落選、第9次国会におけるSDPの議席は0となっている。

¹⁹ キバキのNARC政権の偏向ぶりとその批判については津田[近刊]にまとめたので参照されたい。

²⁰ 政府側からの弾圧による野党各党の地域政党化について、詳しくは津田[2001a]を参照されたい。

²¹ 上述したようにケニアでは、憲法の改正に国会全議席の65%以上の賛成を必要と定めている(憲法第47条)。複数政党制回復後に単独政党(NARC含む)で国会全議席の65%(空席のない場合で222議席中の145議席)を獲得した例は、本稿執筆時の2004年3月1日の時点で、まだない。

²² ただし、こうしたエリート間の協定こそが、2002年総選挙で政権交代を成立させ、ケニアの「一党優位体制」の終了を決定的なものにしたこともまた間違いのない。この動きは、「民主化」を「持ちこたえさせる(endure)」ものとして近年着目されてきた「選挙前段階でのエリート間の協定締結」を想起させるものである(Herbeson[1999: 42])。「一党優位体制」の重要な支柱として導入され、野党弾圧の装置として機能していた「5州25%ルール」は、他の弾圧装置の緩和と政局の変化の中で、全く新しい役割 - 「民主化」後

の「持ちこたえ」要因 - としての機能を一方で持ちはじめているのかもしれない。

²³ 民主主義復興フォーラム - ピーブル (Forum for the restoration of Democracy for the People: FORD - ピーブル)。FORD - ピーブルはNARCには結成時に参加したものの程なく脱退し、2002年総選挙時には独自候補を擁立した。

²⁴ 実はキルワがKANUの内部批判を開始したのは、1996年と他に比較して早期だった。ただし、1997年総選挙直前というタイミングで始まったこの内部批判に対し、当時のモイ政権はキルワへの懐柔策に徹し、懐柔はいったん成功した(キルワとモイは和解、キルワは1997年選挙後の組閣で若干37歳でありながら農業省副大臣に抜擢された)。しかし、この和解は短命に終わった。本文で述べたように、キルワは程なく執行部批判を再開し、重要な法案採決で野党と共同歩調をとるようになった。モイは抜擢からわずか5ヶ月でキルワ副大臣を罷免している(1998年5月27日)。1997年総選挙前の段階でのキルワによる内部批判とそれへの対応については津田[1996]を参照されたい。

²⁵ たとえばKANUは、1990年12月の段階で党規約から除名という処分を廃止している。

²⁶ 複数政党制を採用した1990年代のアフリカ諸国の中では、ケニアと極めて類似した現象が、マラウイでも観察されるようである。本書高根務論文(第4章)を参照されたい。

参考文献

(日本語文献)

- 伊藤光利・田中愛治・真淵勝[2000]『政治過程論』有斐閣アルマ。
 遠藤貢[1996]「アフリカ：一党制への傾斜と複数政党制への回帰」(白鳥令・砂田一郎編『現代政党の理論』東海大学出版会) pp.215-252。
 高橋基樹[1998]「1990年代のケニアにおける『国家建設』の課題と展望」(財団法人日本国際問題研究所『平成9年度自主研究報告書 アフリカ諸国の「国家建設」と課題』) pp.77-93。
 津田みわ[1991]「ケニアの閣僚構成：1974-90年」『アジア経済』第32巻第8号(1991年8月) pp.88-108。
 - [1993]「ケニアの民主化と複数政党制 - 1960~69年を中心に」(原口武彦編『転換期アフリカの政治経済』アジア経済研究所) pp.107-130。
 - [1996]「キルワ発言 - つくられた部族『カレンジン』に巣くう内紛」『アフリカレポート』No.23(1996年9月) pp.14-17。
 - [1998]「ケニア政治史年表」(武内進一編『現代アフリカの紛争を理解するために』アジア経済研究所) pp.197-259。
 - [1999]「ケニア - 複数政党制復帰と『エスニック・クラッシュ』 - 」『アジア研ワールド・トレンド』第43号(1999年3月) pp.10-13。
 - [2000]「複数政党制移行後のケニアにおける住民襲撃事件 - 92年選挙を画期とする変化」(武内進一編『現代アフリカの紛争 - 歴史と主体』アジア経済研究所) pp.101-182。
 - [2001a]「ケニアの複数政党制化と農村社会」(高根務編『アフリカの政治経済変動

- と農村社会』アジア経済研究所) pp.97-137。
- [2001b]「ケニア憲法改革問題の現在：「サファリ・パーク合意」とガイ調停」『アフリカレポート』No.32(2001年3月) pp.17-21。
 - [2002]「ケニア政治史資料(1998~2000年)」(武内進一編『アジア・アフリカの武力紛争 - 共同研究会中間成果報告』アジア経済研究所) pp.235-308。
 - [2003a]「ケニア/つくられる「よそ者」 - コースト州リコニ事件から」『アジア研ワールド・トレンド』第94号(2003年7月) pp.21-23。
 - [2003b]「ケニア：2002年総選挙による『新』政権の樹立」(日本国際問題研究所『アフリカにおける議会と行政府』日本国際問題研究所) pp.89-110。
 - [2003c]「リコニ事件再考 - ケニア・コースト州における先住性の政治化と複数政党制選挙」(武内進一編『国家・暴力・政治 - アジア・アフリカの紛争をめぐって』アジア経済研究所) pp.219-261。
 - [2003d]「2002年ケニア総選挙 - モイの引退と新政権の誕生 - 」『アフリカレポート』No.36(2003年3月) pp.21-26。
 - [近刊]「裏切られた期待 - 政権交代1年目のケニア」『アフリカレポート』No.38。

(外国語文献)

- Barkan, Joel D.[1993]"Kenya: Lessons from a Flawed Election," *Journal of Democracy*, 4(3), pp.85-99.
- Blaustein, Albert P., and Gisbert H. Flanz (eds.)(1988) *Constitutions of the Countries of the World: Kenya*, New York: Oceana Publications, Inc.
- Bratton, Michael [1998]"Second Elections in Africa," *Journal of Democracy*, 9(3), pp.51-66.
- Bratton, Michael, and Nicolas van de Walle[1997] *Democratic Experiments in Africa: Regime Transitions in Comparative Perspective*, New York: Cambridge University Press.
- Ghai, Y. P., and J. P. W. B. McAuslan[1970] *Public Law and Political Change in Kenya: A Study of the Legal Framework of Government from Colonial Times to the Present*, Nairobi, London, and New York: Oxford University Press.
- Harbeson, John W. [1999]"Rethinking Democratic Transitions: Lessons from Eastern and Southern Africa," in Joseph (ed.) [1999] pp.39-55.
- Hornsby, Charles [1989]"The Social Structure of the National Assembly in Kenya, 1963-83," *The Journal of Modern African Studies*, 27(2), pp.275-296.
- Joseph, Richard (ed.) [1999] *State, Conflict, and Democracy in Africa*, Boulder and London: Lynne Rienner Publishers.
- Low, D. A., and Smith Alison (eds.)(1976) *History of East Africa. Volume III*, Oxford: Clarendon Press.
- Odinga, Oginga [1967] *Not Yet Uhuru: the Aurography of Oginga Odinga*, London: Heinemann Educational Books Ltd.
- Okoth-Ogendo, H. W. O. [1972]"The Politics of Constitutional Change in Kenya since Independence, 1963-69," *African Affairs*, 71(282), pp.9-34.
- Ottaway, Marina [1998]"Africa's "New Leaders": African Solution or African Problem?," *Current History*, Vol.97, No.619, pp.209-213.
- [2003] *Democracy Challenged: The Rise of Semi-Authoritarianism*, Washington, D.C.: Carnegie Endowment for International Peace.
- Republic of Kenya [1992]"The Constitution of Kenya Act, 1992," *Kenya Gazette Supplement: Acts 1992, Nairobi 28th August, 1992*, Nairobi: The Government Printer, pp.149-153.
- Rutten, Marcel, Alamin Mazrui, and Francois Grignon (eds.)(2001) *Out for the Count: The 1997 General*

- Elections and Prospects for Democracy in Kenya*, Kampala: Fountain Publishers.
- Throup, David, and Charles Hornsby [1998] *Multi-Party Politics in Kenya*, Oxford, Nairobi, and Athens: James Currey, East African Educational Publishers, and Ohio University Press.
- Verdier, Isabelle (ed.) [2001] *Kenya The Top 100 People*, Paris: Indigo Publications.
- Wanjohi, Nick G. [1997] *Political Parties in Kenya: Formation, Policies and Manifestoes*, Nairobi: Views Media.
- Whitehead, Lawrence [2002] *Democratization: Theory and Experience*, New York: Oxford University Press.
- Widner, Jennifer A. [1992] *The Rise of a Party State in Kenya: From "Harambee!" to "Nyayo!"*, Berkeley: University of California Press.
- Young, Crawford [1999] "The Third Wave of Democratization in Africa: Ambiguities and Contradictions," in Joseph (ed.) [1999] pp.15-38.

[謝辞] 本稿のもとになっている現地調査は、文部科学省科学研究（基盤研究 A(1)）「東アフリカ遊牧圏における生活安全網と地域連環の統合的研究」（研究代表者：佐藤俊）費補助金によって可能となった。記して感謝いたします。

表1 ケニア第8次国会議員(1997年12月-2002年10月):帰属政党の変遷

| 選挙区名 | 番号 | 県 | 候補者のその他の名 | 帰属政党 | | 当選後の動き | 補欠選挙での当選議員 |
|-----------------|----|---------------|--------------------------|-------|--------|--------------------|---------------------------------------|
| | | | | 1997年 | 1992年 | | |
| Makadara | 1 | Nairobi | Paul K. Mugeke | DP | | | |
| Kamukunji | 2 | Nairobi | Norman M. Nyaga | DP | | | |
| Starhe | 3 | Nairobi | Maina Kamanda | DP | | | |
| Langata | 4 | Nairobi | Raila A. Odinga | NDP | F-K現 | | |
| Dagoretti | 5 | Nairobi | Beth W. Mugo | SDP | DP | | |
| Westlands | 6 | Nairobi | Frederick O. Gumo | KANU | | | |
| Kasarani | 7 | Nairobi | Adolf I. Muchiri | DP | | | |
| Embakasi | 8 | Nairobi | David S. K. Mwenje | DP | KANU | | |
| Changamwe | 9 | Mombasa | Ramadhan S. Kajembe | KANU | KANU | | |
| Kisauni | 10 | Mombasa | Emmanuel K. Maita | DP | KANU | | |
| Likoni | 11 | Mombasa | Suleiman Shakombo | SPK | | KANUへ「移籍」(6May02) | |
| Mvita | 12 | Mombasa | Shariff Nassir | KANU | KANU現 | | |
| Msambweni | 13 | Kwale | Marere Wamwachai | KANU | | | |
| Matuga | 14 | Kwale | Suleiman Kamole | KANU | | | |
| Kinango | 15 | Kilifi | Simeon Mkalla | KANU | | | |
| Bahari | 16 | Kilifi | Jembe Mwakalu | KANU | F-K | 死亡(2Dec02) | |
| Kaloleni | 17 | Kilifi | Mathias B. Keah | KANU | KANU現 | | |
| Ganze | 18 | Kilifi | Noah Katana Ngala | KANU | KANU現 | | |
| Malindi | 19 | Malindi | Abubakar Badawy | KANU | KANU現 | | |
| Magarini | 20 | Malindi | David N. Kombe | KANU | | | |
| Garsen | 21 | Tana River | Molu G. Shambaro | KANU | | | |
| Galole | 22 | Tana River | Mugava Tola Kofa | KANU | KANU現 | | |
| Bura | 23 | Tana River | Mohamed A. Galgalo | KANU | | | |
| Lamu East | 24 | Lamu | Mohamed Salim Hashim | KANU | F-K | | |
| Lamu West | 25 | Lamu | Fahim Y. Twaha | KANU | | | |
| Taveta | 26 | Taita | Basil Criticos | KANU | KANU現 | 辞職(14May01) | Jackson Mwalulu: DP (28July01-) |
| Wundanyi | 27 | Taita | Darius M. Mbela | KANU | KANU現 | | |
| Mwatate | 28 | Taita | Marsden Madoka | KANU | | | |
| Voi | 29 | Taita | Basil N. Mwakiringo | DP | | | |
| Dujis | 30 | Garissa | Hussein M. Mohamed | KANU | KANU現 | | |
| Lagdera | 31 | Garissa | Mohamed M. Shidiye | KANU | | | |
| Fafi | 32 | Garissa | Elias Barre Shill | SAF | | KANUへ「移籍」(25May02) | |
| Ijara | 33 | Garissa | Mohamed D. Wirah | KANU | | | |
| Wajir North | 34 | Wajir | Ibrahim Abdulahi Wako | KANU | | | |
| Wajir West | 35 | Wajir | Wehlye Adan Keynan | SAF | | KANUへ「移籍」(25May02) | |
| Wajir East | 36 | Wajir | Mohamed Abdi Mahmud | KANU | KANU現 | | |
| Wajir South | 37 | Wajir | Mohamed Abdi Affey | KANU | | | |
| Mandera West | 38 | Mandera | Sayid Mohamed Amin | KANU | | | |
| Mandera Central | 39 | Mandera | Adan Mohamed Noor | KANU | KANU現 | | |
| Mandera East | 40 | Mandera | Shaban A. Isaac | KANU | KANU | | |
| Moyale | 41 | Moyale | Dr. Guracha Boru Galgalo | KANU | KANU現 | | |
| North Horr | 42 | Marsabit | Dr. Bonaya A. Godana | KANU | KANU現 | | |
| Saku | 43 | Marsabit | Abdi Tari Sasura | KANU | | | |
| Laisamis | 44 | Marsabit | Robert I. Kochalle | KANU | KANU現 | | |
| Isiolo North | 45 | Isiolo | Charfano Guyo Mokku | KANU | KANU現 | | |
| Isiolo South | 46 | Isiolo | Dr. Abdululahi M. Wako | KANU | KANU現 | | |
| Igembe | 47 | Nyambene | Jackson I. Kalweo | KANU | KANU現 | | |
| Ntongiri | 48 | Nyambene | Richard Maoka Maore | DP | DP現 | | |
| Tigania West | 49 | Nyambene | Benjamin R. Ndubai | DP | DP現 | 死亡(6Jan99) | Stephen Mukangu: KANU (24Apr99-) |
| Tigania East | 50 | Nyambene | Mathews A. Karauri | KANU | KANU | | |
| North Imenti | 51 | Meru | Daudi Mwiraria | DP | DP現 | | |
| Central Imenti | 52 | Meru | Gitobu Inanyara | F-K | F-K | | |
| South Imenti | 53 | Meru | Kiraitu Marungi | DP | F-K現 | | |
| Nithi | 54 | Tharaka-Nithi | Bernard N. Mutani | DP | | 当選無効(9July99) | Eustace Mbuba Mwangi: KANU (4Sept99-) |
| Tharaka | 55 | Tharaka-Nithi | Cielito M. Mwendu | DP | | | |
| Manyatta | 56 | Embu | Peter N. Ndwiga | DP | DP現 #1 | | |

| | | | | | | |
|-----------------|-----------------|------------------------------|------|--------|-----------------|-------------------------------------|
| Runyenjes | 57 Mbeere | Augustine Kathangu | F-A | F-A現 | | |
| Gachoka | 58 Mbeere | Joseph W. Nyagah | KANU | | | |
| Siakago | 59 Mbeere | Silas M. Ita | DP | | 死亡(20Apr99) | Justin Muturi: KANU (4Sept 99-) |
| Mwingi North | 60 Mwingi | Stephen Kalonzo Musyoka | KANU | KANU現 | | |
| Mwingi South | 61 Mwingi | David Musila | KANU | | | |
| Kitui West | 62 Kitui | Francis M. Nyenze | KANU | F-A | | |
| Kitui Central | 63 Kitui | Charity K. Ngilu | SDP | DP現 | | |
| Mulito | 64 Kitui | Jimmy M. Kitonga | SDP | DP現 | | |
| Kitui South | 65 Kitui | Samuel Kalii Kiminza | SDP | | KANUへ移籍(5Feb99) | 再選(24Apr99) |
| Masinga | 66 Machakos | Col. Rtd. John Ronald Kiluta | KANU | KANU現 | | |
| Yatta | 67 Machakos | Francis P. Wambua | SDP | | | |
| Kangundo | 68 Machakos | Joseph K. Ngutu | KANU | KANU | | |
| Kathiani | 69 Machakos | Kyalo P. Kaindi | SDP | | | |
| Machakos Town | 70 Machakos | Jonesmus M. Kikuyu | SDP | DP | | |
| Mwala | 71 Machakos | John Mutua Katuku | SDP | | | |
| Mbooni | 72 Makueni | Fredrick M. Kalulu | KANU | DP | | |
| Kilome | 73 Makueni | Anthony W. Ndilinge | KANU | KANU現 | 死亡(2Aug01) | John Mutinda Mutiso: KANU (9Nov01-) |
| Kaiti | 74 Makueni | Gidcon M. Ndambuki | KANU | | | |
| Makueni | 75 Makueni | Prof. P. M. Sumbi | SDP | DP | 死亡(15Sept98) | Peter Maundu: KANU (16Jan99-) |
| Kibwezi | 76 Makueni | Onesmus M. Mboko | SDP | F-A | | |
| Kinangop | 77 Nyandarua | Mwangi K. Waithaka | F-P | DP | | |
| Kipipiri | 78 Nyandarua | Paul Mwangi Githiomi | DP | DP | | |
| Ol Kalou | 79 Nyandarua | Karue M. Muriuki | DP | | | |
| Ndaragwa | 80 Nyandarua | Kamau T. Thrikwa | DP | | | |
| Tetu | 81 Nyeri | Paul G. Muya | DP | | | |
| Kieni | 82 Nyeri | David Munene Kairu | DP | DP現 | 死亡(1Apr98) | Chris Murungaru: DP (16Sept98-) |
| Mathira | 83 Nyeri | Eliud M. Wamac | DP | DP現 | | |
| Othaya | 84 Nyeri | Mwai Kibaki | DP | DP現 | | |
| Mukurweini | 85 Nyeri | David M. Mutahi | DP | DP現 | | |
| Nyeri Town | 86 Nyeri | Wanyiri Kihoro | DP | | | |
| Mwea | 87 Kirinyaga | Alfred M. Ndiritu | DP | | | |
| Gichugu | 88 Kirinyaga | Martha W. Karua | DP | DP現 | | |
| Ndia | 89 Kirinyaga | James K. Kibicho | DP | F-A | | |
| Kerugoya/Kutus | 90 Kirinyaga | John M. Keriri | DP | KNC *2 | | |
| Kangema | 91 Muranga | John N. Michuki | F-P | F-A現 | | |
| Mathioya | 92 Muranga | Francis Maina G. Njakwe | F-P | DP *3 | | |
| Kiharu | 93 Muranga | Ignatius N. Kariuki | SAF | | | |
| Kigumo | 94 Maragua | Onesmus K. Mwangi | DP | PICK | | |
| Maragua | 95 Maragua | Peter K. Mwangi | DP | | | |
| Kandara | 96 Maragua | Joshua N. Toro | DP | | | |
| Gatanga | 97 Thika | David W. Murathe | SDP | | | |
| Gatundu South | 98 Thika | Moses M. Muihia | SDP | | | |
| Gatundu North | 99 Thika | Patrick K. Muiruri | SDP | KANU | | |
| Juja | 100 Thika | Stephen N. Ndicho | SDP | F-A現 | | |
| Githunguri | 101 Kiambu | Njehu Gatabaki | SDP | | | |
| Kiambaa | 102 Kiambu | James N. Karume | DP | DP | | |
| Kabete | 103 Kiambu | Kibugi Paul Muite | SAF | F-K現 | | |
| Limuru | 104 Kiambu | Boniface G. Nyanja | NDP | F-A現 | | |
| Lari | 105 Kiambu | Philip G. Gitonga | SAF | F-A現 | | |
| Turkana North | 106 Turkana | John M. Kiyonga | F-K | | | |
| Turkana Central | 107 Turkana | David Ekwee Ethuro | KANU | F-K | | |
| Turkana South | 108 Turkana | Francis Ewoton Achuka | KANU | KANU現 | | |
| Kacheliba | 109 West Pokot | Samuel L. Poghio | KANU | | | |
| Kapenguria | 110 West Pokot | Francis P. Lotodo | KANU | KANU現 | 死亡(8Nov00) | Samuel Moroto: KANU (12Jan01-) |
| Sigor | 111 West Pokot | Christopher M. Lomada | KANU | PICK | | |
| Samburu West | 112 Samburu | Peter S. Leenges | KANU | KANU現 | | |
| Samburu East | 113 Samburu | Sammy P. Leshore | KANU | KANU現 | | |
| Kwanza | 114 Trans Nzoia | George W. Kapten | F-K | F-K現 | 死亡(25Dec99) | Noah Wekesa: F-K (15Apr00-) |
| Saboti | 115 Trans Nzoia | Michael K. Wanalwa | F-K | F-K現 | | |

| | | | | | |
|-----------------|-------------------|------------------------------|------|-------|-----------------|
| Chereangani | 116 Trans Nzoia | Kipuruto Rono Kirwa | KANU | KANU現 | KANU停職(27Dec00) |
| Eldoret North | 117 Uasin Gishu | William Samoei Ruto | KANU | | |
| Eldoret East | 118 Uasin Gishu | Francis K. Tarar | KANU | | |
| Eldoret South | 119 Uasin Gishu | Jesse Kibet Maizs | KANU | | |
| Marakwet East | 120 Marakwet | John K. Marimoi | KANU | | |
| Marakwet West | 121 Marakwet | David K. S. Sudi | KANU | | |
| Keiyo North | 122 Keiyo | Elijah K. Sumbeiywo | KANU | | |
| Keiyo South | 123 Keiyo | Nicholas K. K. Biwott | KANU | KANU現 | |
| Mosop | 124 Nandi | John K. Sambu | KANU | | |
| Aldai | 125 Nandi | Simeon Kiptum arap Choge | KANU | | 死亡(4Dec02) |
| Emgwen | 126 Nandi | Joseph T Leting | KANU | | |
| Tinderet | 127 Nandi | Henry A. Kiprono Kosgey | KANU | KANU | |
| Baringo East | 128 Baringo | D. Joseph Lotodo | KANU | KANU現 | |
| Baringo North | 129 Baringo | Andrew C. Kiptoon | KANU | | |
| Baringo Central | 130 Baringo | Daniel T. arap Moi | KANU | KANU現 | |
| Mogotio | 131 Koibatek | William C. Morogo | KANU | KANU現 | |
| Eldama Ravine | 132 Koibatek | Musa C. Sirma | KANU | | |
| Laikipia West | 133 Laikipia | Francis Chege Mbitiru | DP | | |
| Laikipia East | 134 Laikipia | Festus Mwangi Kiunjuri | DP | | |
| Naivasha | 135 Nakuru | Paul Samuel Kihara | DP | | |
| Nakuru Town | 136 Nakuru | David Manyara Njuki | DP | | |
| Molo | 137 Nakuru | Dickson Kihika Kimani | DP | | |
| Kuresoi | 138 Nakuru | James Cheruiyot Koskei | KANU | | |
| Rongai | 139 Nakuru | Erick T. Morogo | KANU | | |
| Subukia | 140 Nakuru | Joseph M. Kuria | DP | DP | |
| Kilgoris | 141 Trans Mara | Julius L. K. Sunkuli | KANU | KANU現 | |
| Narok North | 142 Narok | William ole Ntimama | KANU | KANU現 | |
| Narok South | 143 Narok | Stephen K. Ntutu | KANU | | |
| Kajiado North | 144 Kajiado | Prof. George Saitoti | KANU | KANU現 | |
| Kajiado Central | 145 Kajiado | David Lenante Sankori | KANU | KANU現 | |
| Kajiado South | 146 Kajiado | Godfrey M. Parpai | DP | DP | |
| Bomet | 147 Bomet | Kipkalia Kones | KANU | KANU現 | KANU停職(27Dec00) |
| Chepalungu | 148 Bomet | Isaac K. Ruto | KANU | | |
| Sotik | 149 Bomet | Andrew A. K. Kimeto | KANU | | KANU停職(27Dec00) |
| Konoin | 150 Bomet | Raphael arap Kitur | KANU | | |
| Buret | 151 Kericho | Kipkorir M. Sang | KANU | | |
| Belgut | 152 Kericho | Charles D. K. arap Kirui | KANU | | |
| Ainamoi | 153 Kericho | Kipng'eno arap Ng'eny | KANU | | |
| Kipkelion | 154 Kericho | Samuel K. arap Rotich | KANU | | |
| Malava | 155 Malava/Lugari | Peter S. Shitanda | F-K | | |
| Lugari | 156 Malava/Lugari | Khwa Silas Jirongo | KANU | | KANU停職(27Dec00) |
| Mumias | 157 Kakamega | Wycliffe Wilson Osundwa | KANU | | |
| Matungu | 158 Kakamega | Dr. Joseph P. Wamukoya | KANU | | |
| Lurambi | 159 Kakamega | Newton W. Kulundu | F-K | | |
| Shinyalu | 160 Kakamega | Daniel L. Khamasi | F-K | | |
| Ikolomani | 161 Kakamega | Joseph J. Mugalla | KANU | KANU | |
| Butere | 162 Kakamega | Dr. Amukowa Fredrick Anangwe | KANU | | |
| Khwisero | 163 Kakamega | Harrison Away Odongo | KANU | | 死亡(23Nov02) |
| Emuhaya | 164 Vihiga | Washington Sakwa S. Muchilwa | KANU | KANU現 | |
| Sabatia | 165 Vihiga | Wycliffe Musalia Mudavadi | KANU | KANU現 | |
| Vihiga | 166 Vihiga | Yusuf Kifuma Chanzu | KANU | | |
| Hamisi | 167 Vihiga | George Munyasa Khaniri | KANU | | |
| Mt. Elgon | 168 Mt. Elgon | Joseph Naibei Kimkung | KANU | | |
| Kimilili | 169 Bungoma | Mukhisa Kituyi | F-K | F-K現 | |
| Webuye | 170 Bungoma | Musikari N. Kombo | F-K | F-K現 | |
| Sirisia | 171 Bungoma | John B. Munyasia | F-K | F-K現 | |
| Kanduyi | 172 Bungoma | Athanas M. Wafula | F-K | F-K | |
| Bumula | 173 Bungoma | Lawrence S. Sifuna | F-K | F-A現 | |
| Amagoro | 174 Teso | Albert A. A. Ekirapa | KANU | | |

| | | | | | | |
|------------------------|---------------|-----------------------------|------|---------|-----------------|-----------------------------------|
| Nambale | 175 Busia | Chrisantus Okemo | KANU | F-A | | |
| Butula | 176 Busia | Yekoyada Omoto Masakhalia | KANU | | | |
| Funyula | 177 Busia | Arthur Moody Awori | KANU | KANU現 | | |
| Budalangi | 178 Busia | Raphael S. Wanjala | F-K | | | |
| Ugnyia | 179 Siaya | James A. Orenge | F-K | F-K現 | | |
| Alego | 180 Siaya | Peter Oloo Aringo | NDP | | NDP内の反主流派 | |
| Gem | 181 Siaya | Joseph A. Donde | F-K | | | |
| Bondo | 182 Siaya | Robert O. Oburu | NDP | | | |
| Rarieda | 183 Siaya | George O. Ngure | NDP | | | |
| Kisumu Town East | 184 Kisumu | Erick Gor Sungu | NDP | | | |
| Kisumu Town West | 185 Kisumu | Job H. O. Omino | NDP | F-K現 *4 | | |
| Kisumu Rural | 186 Kisumu | Winston Ayoki Ochoro | NDP | | | |
| Nyando | 187 Kisumu | Geoffrey P. Otta Orwa | NDP | | | |
| Muhoroni | 188 Kisumu | William O. Omamo | NDP | | | |
| Nyakach | 189 Kisumu | Peter O. Odoyo | NDP | | | |
| Kasipul Kabondo | 190 Rachuonyo | William O. Otula | NDP | PICK | | |
| Karachuonyo | 191 Rachuonyo | Adhu Awiti | NDP | | | |
| Rangwe | 192 Homa Bay | Shem O. Ochuodho | NDP | | NDP内の反主流派 | |
| Ndhiwa | 193 Homa Bay | Joshua O. Ojode | NDP | | | |
| Rongo | 194 Migori | George M. Ochilo | NDP | | | |
| Migori | 195 Migori | George H. O. Achola | NDP | | | |
| Uriri | 196 Migori | Herman O. Omamba | NDP | | | |
| Nyatike | 197 Migori | Tom O. Onyango | NDP | | | |
| Mbita | 198 Suba | Gerald O. Kajwang' | NDP | | | |
| Gwasi | 199 Suba | Felix U. Kanyauchi | NDP | | | |
| Kuria | 200 Kuria | Shadrack R. M. Manga | KANU | KANU現 | | |
| Bonchari | 201 Kisii | John Z. Opore | KANU | | | |
| South Mugirango | 202 Gucha | Enock N. Magara | F-K | | 死亡(16Oct00) | James Magara: F-K (12Jan01-) |
| Bomachoge | 203 Gucha | Zaphaniah Nyang'wara | KANU | KANU | | |
| Bobasi | 204 Gucha | Christopher M. Obure | KANU | | | |
| Nyaribari Masaba | 205 Kisii | Prof. Samson K. Ongeri | KANU | | | |
| Nyaribari Chache | 206 Kisii | Simeon Nyachae | KANU | KANU現 | KANU停職(27Dec00) | |
| Kitutu Chache | 207 Kisii | Jimmy O. Angwenyi | KANU | | | |
| Kitutu Masaba | 208 Nyamira | George M. Anyona | KSC | KSC現 | | |
| West Mugirango | 209 Nyamira | Henry O. Obwocha | F-K | F-K現 | | |
| North Mugirango/Kerabu | 210 Nyamira | Joseph Ombasa Kiangoi | KANU | | | |
| nominated | | Joseph Kamotho | KANU | | | |
| nominated | | Yusuf Haji | KANU | | | |
| nominated | | Grace M. Mwewa | KANU | | | |
| nominated | | Mark arap Too | KANU | | 辞職(20Sept01) | Uhuru Kenyatta (30Oct01-) |
| nominated | | Zipporah Kiftony | KANU | | | |
| nominated | | Rashid Sajjad | KANU | | | |
| nominated | | Tabilha J. Seii | DP | | | |
| nominated | | Joseph Munyoo | DP | | | |
| nominated | | Maryam Malano | NDP | | | |
| nominated | | Prof. Peter Anyang' Nyong'o | SDP | | | |
| nominated | | Mohammed Galgalo | F-k | | | |
| nominated | | Dr. Richard Leakey | SAF | | 辞職(25Sept98) | Josephine Odera Sinyo (27Sept98-) |

(出典) Rutten et al.[2001]、Throup and Hornsby[1998]、*The Weekly Review*(January 1,1993)、津田[1991; 1998; 2002]より筆者作成。

表中の政党名の正式名称は以下の通り。KANU, Kenya African National Union; DP, Democratic Party; NDP, National Development Party of Kenya; F-K, Forum for Restoration of Democracy- Kenya; SDP, Social Democratic Party; F-P, Forum for the Restoration of Democracy for the People; KSC, Kenya Social Congress; F-A, Forum for Restoration of Democracy- Asili; SPK, Shirikisho Party of Kenya; SAF, Safina Party; KNC, Kenya National Congress; PICK, Party of Independent Candidates of Kenya.

「帰属政党」は、国会議員選挙(補欠選挙を含む)での公認政党。「現」は、1992年国会議員選挙(あるいはその後の補欠選挙)で当選し議員となっていたことを示す。空欄は帰属政党が確認できなかったことを示す。

(注) *1 Runyenjes選挙区; *2 Ndia選挙区; *3 Kangema選挙区; *4 Kisumu Town選挙区。

表2 ケニア第9次国会議員(2002年12月一):帰属政党の変遷

| 選挙区名 | 番号 | 県 | 候補者のその他の名 | 候補者の名 | 帰属政党 | | 備考 |
|-----------------|----|--------------|-------------------|------------------|-------|---------|-------------------|
| | | | | | 2002年 | 1997年 | |
| Makadara | 1 | Nairobi | Reuben Owino | Nyanginja Ndoro | NARC | | |
| Kamukunji | 2 | Nairobi | Norman M. G. K. | Nyaga | NARC | DP現 | |
| Starehe | 3 | Nairobi | Maina Kamanda | | NARC | DP現 | |
| Langata | 4 | Nairobi | Raila Amolo | Odinga | NARC | NDP現 | |
| Dagoretti | 5 | Nairobi | Beth Wambui | Mugo | NARC | SDP現 | |
| Westlands | 6 | Nairobi | Frederick Omulo | Gumo | NARC | KANU現 | |
| Kasarani | 7 | Nairobi | William Opondo | Omondi | NARC | | |
| Embakasi | 8 | Nairobi | David S. Kamau | Mwenje | NARC | DP現 | |
| Changamwe | 9 | Mombasa | Ramadhan Seif | Kajembe | NARC | KANU現 | |
| Kisauni | 10 | Mombasa | Emmanuel Karisa | Maitha | NARC | DP現 | |
| Likoni | 11 | Mombasa | Rashid Suleiman | Shakombo | NARC | SPK現 | KANUへ「移籍」(6May02) |
| Mvita | 12 | Mombasa | Mohamed Najib | Balala | NARC | | |
| Msambweni | 13 | Kwale | Abdalla Juma | Ngozi | NARC | | |
| Matuga | 14 | Kwale | Chirau Ali | Mwakere | NARC | | |
| Kinango | 15 | Kwale | Samuel Gonzi | Rai | F-P | | |
| Bahari | 16 | Kilifi | Joe Matano | Khamisi | NARC | | |
| Kaloleni | 17 | Kilifi | Moris Mwachondo | Dzoro | NARC | | |
| Ganze | 18 | Kilifi | Joseph Kingi | Kahindi | NARC | | |
| Malindi | 19 | Malindi | Baya Mwemi | Lucas Maitha | NARC | | |
| Magarini | 20 | Malindi | Harrison Garana | Kombe | SPK | | |
| Garsen | 21 | Tana River | Danson Buya | Mungatana | NARC | | |
| Galole | 22 | Tana River | Mugaya Tola | Kofa | KANU | KANU現 | |
| Bura | 23 | Tana River | Wario Ali | | KANU | NDP | |
| Lamu East | 24 | Lamu | Mohamed Abubakar | Chiaba | KANU | | |
| Lamu West | 25 | Lamu | Fahim Yasin | Twaha | KANU | KANU現 | |
| Taveta | 26 | Taita | Naomi Namsi | Shaaban | KANU | | |
| Wundanyi | 27 | Taita | J. D. Mwandawiro | Mghanga | F-P | | |
| Mwatate | 28 | Taita | Herman Marsden | Madoka | KANU | KANU現 | |
| Voi | 29 | Taita | Bonface Mganga | | KANU | | |
| Dujis | 30 | Garissa | Hussein Maalim | Mohamed | KANU | KANU現 | |
| Lagdera | 31 | Garissa | Abdullahi Sheikh | Dahir | KANU | | |
| Fafi | 32 | Garissa | Ahmed Aden | Sugow | KANU | | |
| Ijara | 33 | Ijara | Mohamed Yussuf | Haji | KANU | KANU指名現 | |
| Wajir North | 34 | Wajir | Abdullahi Ibrahim | Ali | KANU | | |
| Wajir West | 35 | Wajir | Khalif Mohamed | Ahmad | NARC | KANU | 死亡(24Jan03) |
| Wajir East | 36 | Wajir | Mohamed Mahmud | Abdi | KANU | KANU現 | |
| Wajir South | 37 | Wajir | Abdirahman Ali | Hassan | KANU | | |
| Mandera West | 38 | Mandera | Mohamed Abdi | Haji | KANU | | |
| Mandera Central | 39 | Mandera | Adan Kerow | Billow | KANU | | |
| Mandera East | 40 | Mandera | Shaban Ali | Isaac | KANU | KANU現 | |
| Moyale | 41 | Moyale | Dr. Guracha Boru | Galgallo | KANU | KANU現 | |
| North Horr | 42 | Marsabit | Dr. Bonaya A. | Godana | KANU | KANU現 | |
| Saku | 43 | Marsabit | Abdi Tari | Sasura | KANU | KANU現 | |
| Laisamis | 44 | Marsabit | Titus Lemosei | Ngoyoni | KANU | | |
| Isiolo North | 45 | Isiolo | Dr. Mohamed Abdi | Kuti | KANU | | |
| Isiolo South | 46 | Isiolo | Abdul Bahari | Ali | KANU | | |
| Igembe | 47 | Meru North | Raphel Muriungi | | NARC | NDP | |
| Ntonyiri | 48 | Meru North | Richard Maoka | Maore | KANU | DP現 | |
| Tigania West | 49 | Meru North | Valerian Kilemi | Mwaria | NARC | | |
| Tigania East | 50 | Meru North | Peter Gatirau | Munya | SAF | | |
| North Imenti | 51 | Meru Central | David Daudi | Mwiraria | NARC | DP現 | |
| Central Imenti | 52 | Meru Central | J. Kirugi Laiboni | M'Mukindia | NARC | KANU | |
| South Imenti | 53 | Meru Central | Kiraitu | Murungi | NARC | DP現 | |
| Nithi | 54 | Meru South | Petkey Shen | M'Nkiriia Miriti | NARC | | |
| Tharaka | 55 | Tharaka | Francis Nyamu | Kagwima | F-A | KANU | |
| Manyatta | 56 | Embu | Peter Njeru | Ndwiga | NARC | DP現 | |
| Runyenjes | 57 | Embu | Martin Nyagah | wa Mboru | NARC | | |

| | | | | |
|-----------------|-----------------|--------------------------------|------|------------------|
| Gachoka | 58 Mbeere | Joseph William Nithiga Nyagah | NARC | KANU現 |
| Siakago | 59 Mbeere | Justin Bedan Njoka Muturi | KANU | KANU現 |
| Mwingi North | 60 Mwingi | Stephen Kalonzo Musyoka | NARC | KANU現 |
| Mwingi South | 61 Mwingi | David Musila | NARC | KANU現 |
| Kitui West | 62 Kitui | Winfred Nyiva Mwendwa | NARC | KANU |
| Kitui Central | 63 Kitui | Charity Kaluki Ngilu | NARC | SDP現 |
| Mutito | 64 Kitui | Joshua Kiema Kilonzo | F-P | |
| Kitui South | 65 Kitui | Patrice Ezekiel Mwangi Ivuti | NARC | DP |
| Masinga | 66 Machakos | Benson Itwiku Mbai | NARC | |
| Yatta | 67 Machakos | Phillip James Mutiso | NARC | 死亡(1May03) |
| Kangundo | 68 Machakos | Moffat Muia Maitha | SkS | |
| Kathiani | 69 Machakos | Kyalo Peter Kaindi | NARC | SDP現 |
| Machakos Town | 70 Machakos | Daudi Fredrick Mwanzia | NARC | |
| Mwala | 71 Machakos | John Mutua Katuku | NARC | SDP現 |
| Mbooni | 72 Makueni | Joseph Konzollo Manyao | NARC | DP指名現 |
| Kilome | 73 Makueni | John Mutinda Mutiso | NARC | KANU現 |
| Kaiti | 74 Makueni | Gideon Musyoka Ndambuki | KANU | KANU現 |
| Makueni | 75 Makueni | Kibutha Kibwana | NARC | |
| Kibwezi | 76 Makueni | Richard Kalembe Ndile | NARC | |
| Kinangop | 77 Nyandarua | Mwangi K. Waitaha | NARC | F-P現 |
| Kipipiri | 78 Nyandarua | Amos Muhinga Kimunya | NARC | |
| Oi Kalou | 79 Nyandarua | Karue Muriuki Muriuki | NARC | DP現 |
| Ndaragwa | 80 Nyandarua | Geoffrey Muchiri Gachara | NARC | F-P |
| Tetu | 81 Nyeri | Muta Wangari Maathai | NARC | LPK |
| Kieni | 82 Nyeri | Christopher Ndarathi Murungaru | NARC | DP現 |
| Mathira | 83 Nyeri | James Nderitu Gachagua | NARC | |
| Othaya | 84 Nyeri | Mwai Kibaki | NARC | DP現 |
| Mukurweini | 85 Nyeri | Muthahi Kagwe | NARC | |
| Nyeri Town | 86 Nyeri | Peter Gochohi Muriithi | NARC | KANU |
| Mwea | 87 Kirinyaga | Alfred Mwangi Nderitu | NARC | DP現 |
| Gichugu | 88 Kirinyaga | Martha Wangari Karua | NARC | DP現 |
| Ndia | 89 Kirinyaga | Robinson Njeru Githae | NARC | |
| Kerugoya/Kutus | 90 Kirinyaga | Daniel Dickson Karaba | NARC | |
| Kangema | 91 Murang'a | John Njoroge Michuki | NARC | F-P現 |
| Mathioya | 92 Murang'a | John Joseph Kamotho | NARC | KANU指名現 |
| Kiharu | 93 Murang'a | Kembi Gitura | NARC | |
| Kigumo | 94 Maragua | Onesmus Kihara Mwangi | NARC | DP現 |
| Maragua | 95 Maragua | Peter Elias Mbau | NARC | |
| Kandara | 96 Maragua | Joshua Ngugi Toro | NARC | DP現 |
| Gatanga | 97 Thika | Peter Kenneth | NARC | |
| Gatundu South | 98 Thika | Uhuru Muigai Kenyatta | KANU | KANU指名現 |
| Gatundu North | 99 Thika | Patrick Kariuki Muiruri | KANU | SDP現 |
| Juja | 100 Thika | William Gitau Kabogo | SkS | |
| Githunguri | 101 Kiambu | Arthur Kinyanjui Magugu | KANU | LPD |
| Kiamba | 102 Kiambu | James Njenga Karume | KANU | DP現 |
| Kabete | 103 Kiambu | Kibugi Paul Muite | SAF | SAF現 |
| Limuru | 104 Kiambu | Simon Kuria Kanyingi | KANU | F-A |
| Lari | 105 Kiambu | James Viscount Kimathi | KANU | KANU |
| Turkana North | 106 Turkana | John Kiyonga Munyes | NARC | F-K 現 |
| Turkana Central | 107 Turkana | David Ekwee Ethuro | NARC | KANU現 |
| Turkana South | 108 Turkana | Francis Achuka Ewoton | KANU | KANU現 |
| Kacheliba | 109 West Pokot | Samuel Losuron Poghiso | KANU | KANU現 |
| Kapenguria | 110 West Pokot | Chumel Samuel Moroto | KANU | KANU現 |
| Sigor | 111 West Pokot | Philip Ruto Rotino | KANU | |
| Samburu West | 112 Samburu | Simeon Saimanga Lesirma | KANU | |
| Samburu East | 113 Samburu | Samuel Prisa Leshore | KANU | KANU現 |
| Kwanza | 114 Trans Nzoia | Noah Mahalang'ang'a Wekesa | NARC | F-K現 |
| Saboti | 115 Trans Nzoia | C. Michael Kijana Wamalwa | NARC | F-K現 死亡(23Aug03) |
| Chereangani | 116 Trans Nzoia | Kipuruto Rono arap Kirwa | NARC | KANU現 |
| Eldoret North | 117 Uasin Gishu | William Samoei Ruto | KANU | KANU現 |
| Eldoret East | 118 Uasin Gishu | Joseph Kipehumba Lagat | KANU | KANU現 |

| | | | | |
|-----------------|-------------------|----------------------------------|------|-------------|
| Eldoret South | 119 Uasin Gishu | David Kiptanui Koros | KANU | |
| Marakwet East | 120 Marakwet | Lena Jebii Kilimo | NARC | SDP |
| Marakwet West | 121 Marakwet | David Kiprono Sutter Sudi | KANU | KANU現 |
| Keiyo North | 122 Keiyo | Lucas Kipkosgei Chepkitony | KANU | |
| Keiyo South | 123 Keiyo | Nicholas K. K. Biwott | KANU | KANU現 |
| Mosop | 124 Nandi | John Kipkorir Sambu | KANU | KANU現 |
| Aldai | 125 Nandi | Jimmy Choge | KANU | |
| Emgwen | 126 Nandi | Stephen Kipkiyeny Tarus | NARC | |
| Tinderet | 127 Nandi | Henry A. Kiprono Kosgey | KANU | KANU現 |
| Baringo East | 128 Baringo | Kamama Asman Abongutum | F-P | |
| Baringo North | 129 Baringo | William Kiplumbei Boit | KANU | |
| Baringo Central | 130 Baringo | Gideon K. Towett Moi | KANU | |
| Mogotio | 131 Koibatek | Kipkapt Joseph Korir | KANU | |
| Eldama Ravine | 132 Koibatek | Musa Cherutich Sirna | KANU | KANU現 |
| Laikipia West | 133 Laikipia | Geoffrey Gitahi Kariuki | NARC | KANU |
| Laikipia East | 134 Laikipia | Festus Mwangi Kiunjuri | NARC | DP現 |
| Naivasha | 135 Nakuru | Paul Samuel Kihara | NARC | DP現 |
| Nakuru Town | 136 Nakuru | Mirugi Kariuki | NARC | KENDA? |
| Molo | 137 Nakuru | Moses Kipkemboi Cheboi | KANU | |
| Kuresoi | 138 Nakuru | Macharia Mukiri | NARC | |
| Rongai | 139 Nakuru | Alicen Jemata Ronoh Chelaite | NARC | DP現 * |
| Subukia | 140 Nakuru | Koigi wa Wamwere | NARC | KENDA |
| Kilgoris | 141 Trans Mara | Gideon Sitelu Konchella | NARC | DP |
| Narok North | 142 Narok | William ole Ntimama | NARC | KANU現 |
| Narok South | 143 Narok | Stephen ole Kanyinke Ntutu | KANU | KANU現 |
| Kajiado North | 144 Kajiado | Prof. George Saitoti | NARC | KANU現 |
| Kajiado Central | 145 Kajiado | Joseph Kasaine Nkaissey | KANU | |
| Kajiado South | 146 Kajiado | Geoffrey Mepukori Parpai | NARC | DP現 |
| Bomet | 147 Bomet | Nicholas Kiptoo Korir Salat | KANU | 死亡(5Sept03) |
| Chepalungu | 148 Bomet | John Kipsang arap Koech | KANU | |
| Sotik | 149 Bomet | Anthony Kipkosge Kimeto | KANU | KANU現 |
| Konoin | 150 Bureti | Sammy Cherniyot Koech | KANU | |
| Buret | 151 Bureti | Paul Kipkorir Marisin Sang | KANU | KANU現 |
| Belgut | 152 Kericho | Charles Cheruiyot Keter | KANU | |
| Ainamoi | 153 Kericho | Noah Nondin arap Too | KANU | |
| Kipkelion | 154 Kericho | Dr. Sammy Kipkemoi Ruto | KANU | |
| Malava | 155 Kakamega | Peter Soita Shitanda | NARC | F-K現 |
| Lugari | 156 Lugari | Enoch Wamalwa Kibunguchy | NARC | |
| Mumias | 157 Butere/Mumias | Wycliffe Wilson Osundwa | NARC | KANU現 |
| Matungu | 158 Butere/Mumias | David Aoko Were | NARC | |
| Lurambi | 159 Kakamega | Newton Wanjala Kulundu | NARC | F-K現 |
| Shinyalu | 160 Kakamega | Daniel Lyula Khamasi | NARC | F-K現 |
| Ikolomani | 161 Kakamega | Dr. Boniface Basiye Khalwafe | NARC | F-K |
| Butere | 162 Butere/Mumias | Wycliffe Ambetsa Oparanya | NARC | |
| Khwisero | 163 Butere/Mumias | Julius Odenyo Arunga | NARC | |
| Emuhaya | 164 Vihiga | Kenneth Oriato Marende | NARC | |
| Sabatia | 165 Vihiga | Moses Epaintous Akaranga | NARC | |
| Vihiga | 166 Vihiga | Andrew Ndoofi Ligale | NARC | |
| Hamisi | 167 Vihiga | George Muyasa Khaniri | NARC | KANU現 |
| Mt. Elgon | 168 Mt. Elgon | John Bomet Serut | KANU | |
| Kimilili | 169 Bungoma | Dr. Mukhisa Kituyi | NARC | F-K現 |
| Webuye | 170 Bungoma | Musikari N. Kombo | NARC | F-K現 |
| Sirisia | 171 Bungoma | Moses Masika Wetang'ula | NARC | KANU |
| Kanduyi | 172 Bungoma | Athanas Misiko Wafula Wamunyinyi | NARC | F-K現 |
| Bumula | 173 Bungoma | Silvester Wakoli Bifwoli | NARC | |
| Amagoro | 174 Teso | Sospeter Oteke Ojiamonson | NARC | NDP |
| Nambale | 175 Busia | Chrisantus Oremo | KANU | KANU現 |
| Butula | 176 Busia | Christine Abangu Mango | NARC | |
| Fanyula | 177 Busia | Arthur Moody Awori | NARC | KANU現 |
| Budalang'ya | 178 Busia | Raphael Bitta Sau'u Wanjala | NARC | F-K現 |
| Ugenya | 179 Siaya | Stephen S. A. Ondiek | NARC | |

| | | | | |
|-----------------------|-------------------|-----------------------------|------|------------------|
| Alego | 180 Siaya | Sammy Arthur Weya | NARC | |
| Gem | 181 Siaya | Jakoyo Washington Midiwo | NARC | |
| Bondo | 182 Bondo | Dr. Robert Oburu Odinga | NARC | NDP現 |
| Rarieda | 183 Bondo | Raphael Tuju | NARC | |
| Kisumu Town East | 184 Kisumu | Erick Gor Sungu | NARC | NDP現 |
| Kisumu Town West | 185 Kisumu | Joab Henry Onyango Omino | NARC | NDP現 死亡(13Jan04) |
| Kisumu Rural | 186 Kisumu | Prof. Peter Anyang'-Nyong'o | NARC | SDP指名現 |
| Nyando | 187 Nyando | Eric Opon Nyamunga | NARC | |
| Muhoroni | 188 Nyando | Ayiecho Patrick Olweny | NARC | |
| Nyakach | 189 Nyando | Peter Ochieng Odoyo | NARC | NDP現 |
| Kasipul Kabondo | 190 Rachuonyo | Peter Otieno Owindi | NARC | KANU |
| Karachuonyo | 191 Rachuonyo | Adhu Awiti | NARC | NDP現 |
| Rangwe | 192 Homa Bay | Phillip Okoth Okundi | NARC | KANU |
| Ndhiwa | 193 Homa Bay | Joshua Orwa Ojode | NARC | NDP現 |
| Rongo | 194 Migori | Ochilo Mbogo George Ayacko | NARC | NDP現 |
| Migori | 195 Migori | Owino Likowa Charles Oyugi | NARC | KANU |
| Uriri | 196 Migori | Hennan Ombamba Odhiambo | NARC | NDP現 |
| Nyatike | 197 Migori | Ochola Tobias Orao Ogur | NARC | |
| Mbita | 198 Suba | Gerald Otieno Kajwang' | NARC | NDP現 |
| Gwasi | 199 Suba | Zaddock Madiri Syongoh | NARC | |
| Kuria | 200 Kuria | Dr. Wil Gisuka Machage | NARC | SDP |
| Bonchari | 201 Kisii Central | John Zebedeo Opopre | F-P | KANU現 |
| South Mugirango | 202 Gucha | James Omingo Magara | F-P | F-K現 |
| Bomachoge | 203 Gucha | Joel Omagwa Onyancha | F-P | |
| Bobasi | 204 Gucha | Stephen Kengere Manoti | F-P | SAF |
| Nyaribari Masaba | 205 Kisii Central | Dr. Hezron Manduku | F-P | |
| Nyaribari Chache | 206 Kisii Central | Simeon Nyachae | F-P | KANU現 |
| Kitutu Chache | 207 Kisii Central | Jimmy Ondieki Nuru Angwenyi | F-P | KANU現 |
| Kitutu Masaba | 208 Kisii North | Nyang'au Samson M. Okiona | F-P | F-K |
| West Mugirango | 209 Kisii North | Henry Onyancha Obwocha | F-P | F-K現 |
| North Mugirango/Brabu | 210 Kisii North | G. Okeri Masanya | F-P | DP |
| nominated | | Betty Telf | NARC | |
| nominated | | Dr. Julia Ojamba | NARC | |
| nominated | | Oloo Aringo | NARC | |
| nominated | | Adelina Mwau | NARC | |
| nominated | | Cecily Mbarire | NARC | |
| nominated | | Njoki Ndung'u | NARC | |
| nominated | | Franklin Bett | NARC | |
| nominated | | Dr. Esther Keino | KANU | |
| nominated | | Mufula Kilanzo | KANU | |
| nominated | | Prof. Ruth Onyang'o | KANU | |
| nominated | | Amina Abdulla | KANU | |
| nominated | | Kipkalia Kones | F-P | |

(出典) Rutten et al. [2001]、ケニア選挙管理委員会HP (<http://www.eck.or.ke/> 2004年3月9日アクセス)、Daily Nation 紙各号から筆者作成。

表中の政党名の正式名称は以下の通り。KANU, Kenya African National Union; NARC, National Rainbow Coalition; SkS, Sisi kwa Sisi Party of Kenya; F-P, Forum for the Restoration of Democracy for the People; DP, Democratic Party; NDP, National Development Party of Kenya; F-K, Forum for Restoration of Democracy- Kenya; SDP, Social Democratic Party; KSC, Kenya Social Congress; F-A, Forum for Restoration of Democracy- Asili; SPK, Shirikisho Party of Kenya; SAF, Safina Party; LPK, Liberal Party of Kenya; LPD, Labour Party Democracy; KENDA, Kenya National Democratic Alliance.

「補属政党」は、国会議員選挙(補欠選挙を含む)での公認政党。「現」は、1997年国会議員選挙(あるいはその後の補欠選挙)で当選議員となっていたことを示す。「指名現」は、大統領指名議員候補で国会議員になっていたことを示す。空欄は補属政党が特定できなかったことを示す。

(注) * Nakuru Town選挙区。